

●モノグラフ

小学生ナウ

Vol. 11-9

養護教諭

目次

| | |
|-------------------------------|---|
| 子ども研究ノート（その8） 女の先生・男の先生 | 2 |
|-------------------------------|---|

調査レポート

養護教諭

| | |
|------------------------|----|
| 要約 | 8 |
| はじめに | 12 |
| 1. 養護教諭の実態 | |
| ●調査対象者 | 15 |
| ●養護教諭を選んだ理由 | 21 |
| ●養護教諭の一日 | 22 |
| ●養護教諭の仕事 | 23 |
| 2. 保健室に来る子ども | |
| ●保健室の利用状況 | 27 |
| ●保健室によく来る子ども | 28 |
| ●子どもからの悩み相談 | 29 |
| 3. 問題をもった子どもに関わりたいか | |
| ●意欲の有無 | 32 |
| ●自信の有無 | 35 |
| ●研修について | 39 |
| 4. 学校の中の養護教諭 | |
| ●保健室の設備などについて | 42 |
| ●ストレスや孤独感をめぐって | 43 |
| ●とにかく忙しいのです | 48 |
| ●養護教諭の役割をめぐって | 49 |
| ●自己評価 | 53 |
| おわりに | 55 |
| 資料1 調査票見本および集計結果 | 57 |

*おことわり：本文中に使用した写真は、本文・テーマとはいっさい関係ありません。

女の先生・男の先生

静岡大学教授

深谷 昌志

●権威をもたない教師の強さ

この号では「保健室の先生」方の考え方を主なテーマとしている。問題をもった子どもたちが保健室に出入りすることが多いといわれる。

そうした傾向は小学校よりも中学校に強く認められるようだが、どうして問題をかかえる子どもたちが保健室を訪ねるのか。

保健室の先生は、教科の指導をしない。いわば、学校の中では数少ない評価をしないおとなである。したがって、子どもたちも保健室を気軽に訪ねることができる。そうした意味で、保健室は学校の中では、子どもたちがくつろぐことのできる安心できる場なのであろう。

アメリカなどを訪ねると、学校にカウンセラーが常勤している。そして、ストレスなどを感じる子どもはカウンセラーを訪ねて相談にのってもらう。しかし、日本の場合、カウンセラー制度が充実していないので、保健室がカウンセラーの代わりを果たしているよう

な気がする。

保健室の先生がなまじの権威をもっていないことが子どもたちに安心感を抱かせ、そして見方によれば、子どもからの信頼を勝ち取っている。そうした意味では、保健室の先生も立派な先生なのだと思う。

それと同時に、保健室の先生が女性で、なんとなくやさしい雰囲気をもっていることも保健室への出入りをさかんにしている原因のひとつであろう。そこで以下、教師にとっての性差について考えてみたいと思う。

●女性教師の長所・短所

子どもたちに、女教師と男教師についての評価を求めたことがある。オープン・アンサーの形で、それぞれの好きなおところと嫌いなおところを尋ね、それを整理すると以下のとおりとなる。

女の先生の

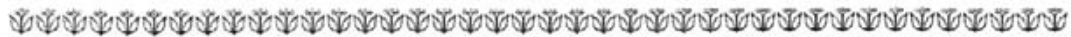
好きなおところ

1. やさしい

嫌いなおところ

1. 細かいことをいう





- | | |
|------------|-------------|
| 2. 親切 | 2. 感情的になる |
| 3. 教え方がうまい | 3. えこひいきをする |

男の先生の

- | | |
|-----------|-------------|
| 好きなところ | 嫌いなところ |
| 1. 頼もしい | 1. 乱暴 |
| 2. おもしろい | 2. 怒るとこわい |
| 3. 体育がうまい | 3. えこひいきをする |

なんとなく納得できる結果だが、データの整理をしているうちに、これは、女の先生・男の先生というより、母親そして父親の好きのところ・嫌いなところを尋ねたのと同じ内容なのではと思うようになった。

そこで、大正時代の女教師をめぐる動きを思いおこした。大正5年に帝国教育会は「女教員問題に関する調査」報告書を発表している。これはそのころ、女教師の割合が3割に迫ったので、女教師の長所と短所とを明らかにし、女教師の適正比率を定めようとしたもので、報告書作成にあたって、全国の主だった師範学校長や小学校長の意見を求めている。

- | | |
|---------------|------------|
| 女性教師の長所 | 女性教師の短所 |
| 1. 忠実に指揮に服する | 1. 研究心に乏しい |
| 2. 愛情にとむ | 2. 愛情が偏りがち |
| 3. 細かいところに気づく | 3. 応用力に欠ける |

そして、上記のような女教師の特性をふまえると、小学低学年と高学年の女子組、さらに、家庭科担当を含めて、女教師の比率は3分の1程度が妥当と結論づけている。

帝国教育会の調査は70年以上前に実施されたものだが、現代でも納得できる面が少なくない。

実際に、親たちを対象として女教師・男教師の長所と短所について調査を行うと、帝国教育会のデータとほとんど変わらない数値が

得られる。具体例として、学年ごとに担任として、女性と男性のどちらが望ましいかを尋ねた結果がある。小1=86%、小2=73%、小3=51%、小4=39%、小5=24%、小6=21%が、女教師の担任を望む割合である。

こうした傾向は、男性と女性、あるいは父親と母親の特性を、男教師と女教師にダブらせてとらえたもので、母性教師論と名づけられるような見方となる。

そして、歴史的な系譜を探ると、明治初年のお雇い外国人、グビット・マレーは、「女子ハ児童ヲ遇スルニ其愛情忍耐アルコト男子ニ優レリ」を理由として、女教師育成策を提唱している。また、森有礼も、「幼稚者ヲ教育スルハ至難至重ノ事ニテ特ニ女子ノ長所ニ係ル」として、子どもの扱いのうまい女子を「天然ノ教師」と呼び、女子師範の設立に乗り出している。

その後も折にふれて、母性教師論が教育界に登場しているが、冒頭で紹介した子どもたちの反応は、そうしたおとなたちの見方を反映したもののように思われる。親たちが、低学年のうちは女の先生のほうがよい、あるいは、男の先生と比べ、女の先生はやさしいなどと言っているのを耳にしているので、子ども自身もそう信じるようになる。

●担任の先生への評価

別の機会に、子どもたちの担任に対する気持ちを調査したことがある。担任からいつも評価されているから、たまには子どもが担任を評価してもよいのではないか、そうした軽い動機からの調査だったが、協力してくれる教師が少ないので、かなりの期間をかけてサンプルをふやしていった。

60学級の協力が得られた段階で、データの整理を行った。その際、担任が男性か女性かを軸として集計を試みた。男の先生、あるい





は女の先生が担任しているクラスのデータなのであるから、仮に教師による性差が大きいのだとしたら、そうした開きが数値となってあらわれるはずである。

| | 女性教師 | 男性教師 |
|--------------|------|------|
| ① 教え方がうまい | 69% | 63% |
| ② 黒板の字がきれい | 71% | 58% |
| ③ 教え方がわかりやすい | 62% | 54% |
| ④ えこひいきをしない | 43% | 39% |
| ⑤ 悩みごとを話しやすい | 35% | 21% |
| ⑥ 昼休みに遊んでくれる | 13% | 35% |

(「とてもそう思う」割合)

「昼休みに遊んでくれる」のは男の先生のほうが多く、その他、「放課後、遊び相手になってくれる」や「体育の授業がおもしろい」などにも、男教師優位の傾向が認められた。

しかし、全体としてみると、担任に対する評価に女教師と男教師による開きは少なく、



「教え方がうまい」や「黒板の字がきれい」「悩みごとを話しやすい」「来年も受け持ってほしい」などの項目では、女教師に対する評価は男教師を上回っていた。

もちろん、こうした調査は、子どもがしっかりと反応できるのを前提としているので、小学5年生を調査学年と定めた。したがって、母性教師論的な見方をすると、男の先生のほうが評価が高まる学年にあたる。それにもかかわらず、上述したように、子どもの担任評価に男教師と女教師の差は少なく、どちらかといえば、女教師に対する評価は男教師を上回っていた。

女の先生か男の先生かを問わずに、担任についての気持ちを尋ねてみる。その結果、男女差が認められない——もしくは、女教師のほうが評価が高い——ということは、冒頭で紹介した女教師の長所・短所が観念の世界の産物であることを示している。

つまり、子どもたちに限らず、おとなたちも、女教師の長短といわれると、男女のイメージをダブらせて、女教師像を作る。しかし、個々の教師の働きを手がかりにすると、性差が認められなくなる。したがって、教師としての実際の働きをふまえる限り、子どもにとって、担任の先生がいるだけであって、男の先生、女の先生という差はそれほど大きな意味をもたないように思われる。

男らしさ、あるいは女らしさとは何かと考へはじめると難しい議論になる。そこで、それほど厳密な論議を避け、常識レベルの意味で考えることにしたいが、教職は、どちらかというところ、女性度の高い職種であろう。

こうした言い方をすると暴論と思われがちだが、さまざまな仕事の中で、教職は、肉体的な強さをそれほど必要としない。あるいは、機械を相手にクールに働く仕事ではない。そして、子どもを相手に指導するのはたしかだ





が、つきつめていうと、世話をする仕事であることを考えていけば、やはり、教職は女性度の高い職種であろう。

したがって、教師をしている男性は、伝統的な見方からすると、男性の中では男性度のやや乏しいタイプになる。という、男教師を批判するように思われがちだが、男性度の高さが人間の尊厳に関係しないのはいうまでもない。

そうした一方、多くの女教師は家庭をもちながらフルタイムの仕事に従事している。教職を続けている過程で、家庭と仕事との両立の難しさに悩んだことも多かろう。しかし、困難を乗り越えて教職に従事しているのであるから、いわゆる女性らしさを脱したタイプといえよう。意志が強く、意欲的でがんばる女性であるから、伝統的な言い方にしたがうなら、どちらかという、女性の中では男性的な人たちとなる。

男教師たちは、男性の中ではやさしさや温かきをもった人たちであり、女教師は知的で

がんばるタイプである。したがって、教職の場合、性差は予想されるほど大きくなく、むしろ性差は少ないのではないか。そう考えてくると、担任の先生に対する評価に性差が少ないという子どもたちの見方は現実をふまえたもののように思われてくる。

●男性教師のほうが気がかり

すでにふれたとおり、担任についての評価に男女差が認められなかったが、もう少しこまかく分析を行ってみると、それでも、男女差の顕著な項目も認められる。

男の先生に担任されている子どものほうが評価の高い項目

1. 昼休みに遊んでくれる
2. 体育の授業がうまい
3. 理科の授業がうまい
4. ユーモアがある
5. 放課後、遊んでくれる





女の先生に担任されている子どものほうが評価の高い項目

1. 悩みごとを話しやすい
2. 黒板の字がきれい
3. 音楽の授業がうまい
4. 教え方がわかりやすい
5. 国語の授業がうまい

こうした開きは、少ないといっても、男教師と女教師のそれぞれに特性があるのを感じさせるが、念のために、子どもたちに担任の先生を好きかどうか尋ねてみた。

男性の教師に対しては、「とても」の19%に「かなり」を含めて、担任を「好き」が61%であるのに対し、女教師の場合、「とても」の23%を含めて、「好き」が76%に達した。

さらにいえば、教師の年齢別にクロスしてみると、男教師は20代が71%、30代は59%、40代が52%となる。したがって年齢が上がるにつれて子どもからの評価が急速に低下している。しかし、女教師の場合、20代=79%、30代=76%、40代=71%のように、低下の仕方はそれほどシャープではなかった。

こうしたデータを手がかりにすると、女の先生のほうが子どもたちから好かれており、そうした開きは、教師としての年齢を重ねるにつれて、さらに大きくなるといえよう。

子どもから好かれることが、教師としてのベストの条件だとは思わない。時として、好かれてはいなくとも、よい先生という場合もありえよう。しかし、尊敬とか信頼とかは、おとなの言葉であり、子どもの感覚にしたがうなら、「先生が好き」を無視できないように思う。

残念ながら、中高年の教師と比べ若い教師のほうが子どもから好かれるのはたしかであろう。それだけに、教師という職業の場合、生理的に加齢するのはやむをえないとはいえ、

感覚的に老いてはいけないのであろう。それでも40代の女教師は、40代の男教師と比べれば、子どもに好かれる可能性が強い。

こう考えてくると、性差でとらえたとき、女教師よりもむしろ男教師が、教師としての魅力をいかに作っていくかが気かりとなる。とって、40代の男教師が子どもの遊び相手になったり、体育の指導をうまくするのは、肉体的に難しからう。ユーモアがあり、人間的に尊敬でき、何でも話せる感じがする……、そうしたカウンセラー・タイプに成長することが、男性教師に求められる方向のように考えられる。

●育児をいかに乗り切るか

このようにみてくると、女教師にとって好ましかぎりのデータだが、さらにこまかく個別の分析を続けると、気かりな傾向が浮かんでくる。

全体として評価した場合、女教師が子どもたちから支持されているのはたしかだが、個人ごとのデータに着目すると、下位のほう、つまり、子どもから好かれていない教師の中に女教師の占める割合が多い。

しかも、下位に位置する男教師は比較的年齢も高く、若さという点で、子どもと距離のあいたタイプが少なくない。すでにふれたとおり、中高年から教師としての魅力をいかに作っていくのかは教師論の中でも難しい、そして、未開拓の分野であろう。

もともと、中高年の男教師のために指摘しておくなら、さすがに「黒板の字がきれい」や「教え方がわかりやすい」など、授業の技法の面では高い評価を得ている。しかし、「悩みごとを話しやすい」や「昼休みに遊んでくれる」などの評価が低く、それが、子どもから好まれない原因を作っている。

したがって、中高年に対する評価の低さに





それなりの背景が考えられるが、評価の低い女教師の場合、30代が多いのが目につく。

そこで、何人かの教師に取材してみた。その結果わかったのは、こうした女教師に共通しているのが、乳幼児をかかえる母親という立場だった。

たしかに、幼い子どもをかかえて教職を続けるのは茨の道であろう。さいわい、親たちと同居するか、それとも、近くに親たちがいれば、そして、よき隣人に恵まれれば、両立の困難はかなり減少する。

しかし、夫婦だけで保育園に頼って子育てをすることになると、母親のほうに負担が重くのしかかってくる。

専業主婦か、それとも、フルタイムで働くかによって、基本的に家庭の構造が異なる。収入をもたらす者と家のきりもりをする者とが分業の形をとっているのが前者の家庭とするなら、夫と妻とがともに働き、そして家庭のきりもりをするのが、共働きの家庭であろう。

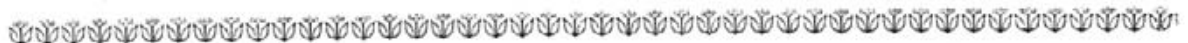
しかし、どうしたことか、共働きの夫たちは家事を分担しようとしなない。そのため、家事や育児の負担が妻のほうにかかり、それが教師としての働きに影響を及ぼす。

子どもが中学生になり、高校生になっても、親としての配慮が必要だが、子どもに時間をとられるのは、やはり学齢までであろう。そして、子どもが2人と仮定したら、長く見積もっても10年間が、育児の時期にあたる。

その10年間、夫の協力を求めつつ、さまざま形で家事や育児の軽減を図る。収入があるのだから、家庭の電化を進めて家事を合理化する。あるいは、保育園とは別に、ベビーシッター的な人を頼む。そして、少しせいたくでもリッチな外食をする機会をふやすなどが、そのための具体策であろう。

育児の時期さえ乗り切れば、家庭と教職と

の両立はさほど難しくない。それだけに、その10年間をがんばってほしいが、先に紹介した大正5年の女教員調査を受けて、翌6年、全国小学校女教員会が開催された。その席上、女教師の部分勤務案が審議された。育児期間、女教師が希望すれば、給与をへらすかわりに勤務も午前中だけとする案だが、現実的な提案だと賛成する者と、それでは教師としての力量が低下すると反対する者との意見が二分し、審議未了となった。しかも、それから後の会議でも結論がでることなしに、平成の時代に入っても論議を重ねている。そして世の中の状況が大きく変わったといっても、育児と仕事との両立の難しさは現在でもなお受けつがれており、この問題については昔も今もないのかもしれない。



調査レポート 養護教諭 要約

東京学芸大学教授 深谷和子
啓明学園教諭 船越恵子

1. 養護教諭の中で、高年齢層に養護教諭以外の職歴（看護婦、保健婦など）のある者が多く、若年層は4年制大学卒が増えている。（図4、図2）



2. 養護教諭の半数以上の者が、保健室だよりを含めた保健活動以外の校務分掌を担当しており、その内容も給食・清掃関係をはじめさまざまである。（図9）



3. 昨日一日に保健室に来た子どもの人数は平均で30人であったが、その内訳をみると、病気やケガ以外の来室者が過半数を越す。（図12、表5）

4. 病気やケガで保健室に来る子どもは低学年に多いが、遊びにくる子どもは圧倒的に高学年、しかも女子が多い。(図13)

5. 子どもが養護教諭にする悩みの内容は、「友だちのこと」「男女交際や性のこと」「先生のこと」などさまざまであるが、相談する学年は高学年が多く、男女別では女子が多い。(図14、図15、図16)



6. 養護教諭は、学級担任との人間関係はうまくいっているが、校内での立場が弱く、子どものことでもっと情報がほしいし、担任ともっと話し合う機会がほしいと望んでいる。(図26、図29)

7. しかし、問題をかかえた子どもへの対応は現状では担任中心で、と考える養護教諭が多い。たぶんそれは、心の問題を取り扱いたくても自信のない者が多いことからくるのだろう。(図17、図19、図20)

要 約

8. 養護教諭の仕事上の悩みは、忙しさや保健活動への無理解、設備などの不足などさまざまである。(図25～29)

9. 養護教諭の仕事上の喜びは、「子どもとのふれ合い」「卒業生が来てくれたり、手紙をくれること」など、子どもとの接触をあげた者が多い(表9)。また、養護教諭の6割が仕事を好きだと答えている。(図30)



●調査概要

1. 調査主題 養護教諭
2. 調査視点 保健室の教師である養護教諭の目を通して、保健室での仕事の内容や養護教諭のかかえる悩み、そしてこうありたいとする役割などを探っていく。

3. 調査項目 養護教諭の一日、子どもの保健室の利用状況、養護教諭の仕事、保健室に来る子どもについて、問題をもった子どもの対応、学級担任に対して感じること、学校で感じること、など。

10. 養護教諭の役割として95%の者が「心と身体の両方を同じくらいに」と考えており(図31)、研修の機会を強く望む者も4割近くいる(図23)。内容的には「カウンセリング」「児童心理学」などの研修を受けたいと思っている者が多い。(図24、表6、表7)

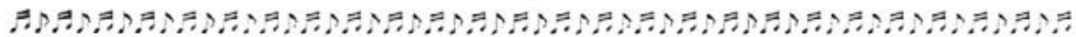


11. しかし(その役割を誰が担うかは別として)学校に心の問題の専門家が心要と考える者は「少しそう思う」を含めると7割にも達する。そのために研修機会の増大も含め、とくに大規模校では、複数養護教諭のシステムが必要ではなかろうか。(図28)



4. 調査時期 平成3年6月～7月
5. 調査対象 全国の小学校に勤務する養護教諭
6. 調査方法 全国の小学校の中から10分の1無作為に抽出(2,500校)し、用紙を郵送して、養護教諭から直接返送された。

7. サンプル数 全国の小学校の養護教諭908名(回収率36%)



はじめに

学校には行きたくないけれど、保健室だったら行けるといふ子どもが増えてきている。子どもは保健室には一般教室とは違った雰囲気を感じとっているのであろう。保健室に行けば、病気やケガの様子をみてくれるし、ベッドで休むこともできる。そこには家庭にも似た温かさと安らぎがある。競争はないし、忙しい時間の流れもない。何よりも子どもにとって魅力的なのは、養護教諭が母性的存在として、自分に個人的関わりをもとうとしてくれる点にあるのだろう。

養護教諭は身分的には他の教師と同じだが、一般的には担任をもたず成績もつけない点で、学級担任とは異なった存在である。学校でも塾でも、そして家庭でも「評価」されることに疲れた子どもたちは、母親以外の母性的存在を求めて保健室へ逃げ込んでくる。それを感じとって、学校カウンセラーの代わりに子どもの気持ちを受け止め、その悩みの相談相手、時にはもっとたわいのない話相手をつとめることで、子どものからだの手当て（病気やケガ）だけでなく、心の手当てをも自分の役割と考える養護教諭が増えてきていると聞く。しかし、その努力に対して学級担任などから「子どもを甘やかしている」と非難されることもあるとか。しかし養護教諭は学校に1人しかいない。同職の仲間をもたない点で立場も弱いし、養護教諭としての主張も他の教師の協力や理解を得るのも難しい。子どもが学校にいる時間中は研修にも出張にも出ら

れない。留守中に病気やケガの子が出たとき、代替して手当てをしてくれる人がいないからである。複数養護教諭制などは、一部を除いて、夢のまた夢にしかない。

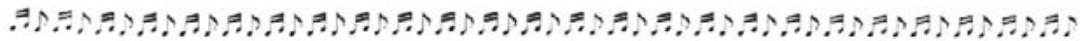
しかし近年、子どもの問題行動の増加によって子どもの心の問題がクローズアップされるようになり、改めて養護教諭の役割が見直されはじめています。

この調査は、養護教諭を対象に、養護教諭の日常生活と意見を明らかにすることで、学級担任をはじめ、親や学校外の人々にも養護教諭の置かれている立場を理解し、その活動に協力してもらうことができるようにと願って企画された。

なお調査の方法は、全国の小学校をほぼ無作為に10分の1抽出し、2,500校の校長に用紙を発送した。校長から養護教諭に用紙が渡され、各養護教諭から（校長を経由せず）直接郵便で返送された。有効回答数は908名（約36%）であった。実施時期は平成3年6月から7月である。

（なお今回の調査にあたっては、多くの調査票のオープン・アンサー部分にきわめて詳細な記入がされていたのが印象的であった。「保健室をテーマに取り上げていただき、感謝しております」と書きそえられたものもあった。そのうちの71名の先生方の文章を、各節の終わりに掲載させていただいた。とかく外には伝わってこない養護教諭の肉声を聞く思いがする。ぜひお読みいただきたい。）





子どもたちが問題化し、親がダメになってきています。

●今春、転動して現在校でやっと3か月。現在校は保健活動があまり活発でなく、これをいかにして軌道に乗せるか課題である。赴任してきた当初は、現在校の子どもたちと心が通じなくて悩んだが、こちらが子どもとの対応をひとつひとつ丁寧に取り組むことによって、最近はずいぶん改善されてきているな…と、喜んでいる。

それにしても、年々、子どもたちのしつけができていなくて、行動は粗雑で、けじめがなく、忍耐力、自己コントロールに欠けている…など感じ、教育現場の教師の指導力の限界を超えているとも感じる。

教師たちは真剣である。今後、ますます親の養育能力低下が進むと考えられるが、この子らが支えていく日本の将来が本当に案じられる。

●問題に思うこと…子どもたちが身体を動かすということをきらい、きらいなことは理由をつくってでもさげようとしている。

積極性がなく、他人をたよりすぎている（いろいろな環境的な問題もあると思われるが）。

クーラーなどにたよる。

ブルがいやだと、わざと熱をあげる。

交通機関などの発達にともなって、身体を動かすことがなく、そのために少し運動しても、ちょっと歩いても筋肉痛を訴える。また、骨折も多い。

●全体的にみて、低学年も高学年も甘えっ子が多く、1対1で接していると、からだにふれたがったり、話をしたがったりする。そして、一度甘えてしまうと、皆といるときも、大勢といるときもその関係を求めたがる。

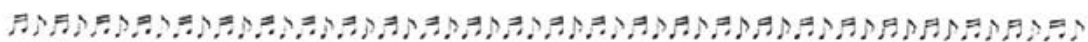
子どものからだのことは、家庭での生活と関係が深い。両親が共働きのため、朝は忙しく、朝食をつくるひまがないので、食べてこない子や、塾通いのため、遊ぶひまもなく疲れている子、また、おばあちゃん子で、必ずおばあちゃんがジュースをのませるために肥満気味の子など、学校と家庭の関係を密にしていかなければ解決しない問題点が多い。しかし、問題解決には時間がかかりそうだ。

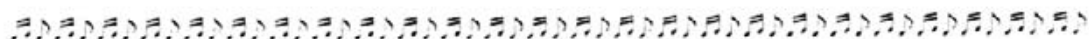
●昨日、家でしたケガの手当てを保健室で行う子が多く、休み時間になると、保健室はいっぱいになる。傷をみて、家でしたケガは家で手当てするようにかえすこともあるが、線をひくのはむずかしいところもある。

学校はこんな状況でいいのですか。

●アンケートで書けなかったことで、今一番感じていることを書いておきます（管理職にはみせられないので）。

とにかく学級担任が忙しすぎる。毎日3時すぎから会議が2つも3つもあり、（勤務時間は4時までなのに）4時半だろうが5時だろうが平気で会議を続けている。ひどいときには5時すぎからまた会議を始め、遅い人は8時、9時まで学校にいる。朝は朝で特別クラブというの

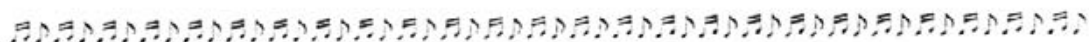




があり、7時前に学校に来ている人もいます。これだけ忙しくしているのに研究発表をしたという意見も一部から出ている。

たくさんある仕事をこなすために、男性はヘビースモーカーになり、女性はお菓子を食べている。いつみても先生方の顔色は悪い。煙草のために粘膜をやられて咳込む女性もたくさんいる。1年に1人は倒れて入院する先生が必ず出てくる。

そんな状態だから、学校の中は落ち着かず、病院へ行くような大きなケガをする子どもがとても多い。最近では、ほとんど毎日のように子どものケガで病院へ通っている。教育現場がこんなことでいいのか、いつかもっと大きな事故がおきるのではないかと、気が気でない。今一番心配なのは、先生方の健康と子どもたちの安全面に関わることだと思っている。



1. 養護教諭の実態



■ 調査対象者 III

調査の対象となった養護教諭の年齢は、20代30代の若い人々が多く、合わせて7割を超える(図1)。平均年齢は35.3歳であった。

また対象となった養護教諭の学歴は図2が示すように、短大・専門学校卒が約半数で、次いで看護学校卒が27%、4年制大学卒は13%である。学歴を年齢別にみると、40歳以上では看護学校卒業者が最も多く(46%)、半数に近いのに対して、20代30代の養護教諭は短大・専門学校の卒業者が5、6割である。中でも20代では4年制大学卒が25%で、若い層ほど一般教師の性格に近づいていく様子がみられる。

また養護教諭になった年齢を表1に掲げた。

次に図3によると、養護教諭以外の職歴がある者は25%で、図が示すように看護婦の経

験者が62%と多い。また、これを年齢別にみると、図4のように50歳以上では58%が養護教諭以外の職を経験しているのに対し、20代30代でのそれは18%と2割に満たない。このように、同じ養護教諭でありながら、経歴はさまざま、特に高年齢層で看護婦の経験者が多いことが特徴的である。また図5に掲げたように、既婚者が7割、子どものいる者が6割(図6)と、お母さんの性格をもっている人々が多いことがわかる。

看護婦から養護教諭になって1か月。あせっています。

●今まで看護婦で、学校のことは全くわ

からず、毎日悪戦苦闘しています。次々にわからない仕事に直面し、その度に悩み、かたづくのにとても時間がかかり、忙しく、自分でこんなことをやってみないなあと思っても、決められた仕事に追われている状態で、今まで抱いていた養護教諭とは全然違うなあと思っています。また、保健以外の給食の集金まとめや事務的なこと、プール清掃、管理などの仕事が多いのには驚いています。

まだ1か月なので、わからないことだらけですが、教頭に聞いてもわからず、相談相手もいなくて、この孤独に耐えられなくなっています。先生方もなかなか話ができず、話題もなくて、いけないと思いつつ保健室についついこもってしまいます。

私は今、臨時ですが、このままでは何も得られず、進歩もないまま期間が終わってしまうのでは…と、あせっています。養護教諭の免許を早くとるようにと強く決意したのですが、仕事はきつくて、夜勤もあり、とても大変だったけれども、何かと楽しかった看護婦時代を思い出すと戻りたくなくなってしまいます。まだこんな状態で、働きがいなどを感じる余裕がなく、悩みはたえません。

忙しいこと自体は、今まで看護婦をやっていたので苦にならないのですが、孤独でさみしいというのが、現在一番いやです。うるさくても子どもたちがよく遊びにきてくれるのが、今の私にとって大きな心の支えです。

ベテラン養護教諭から

●20年目ともなると、養護教諭の仕事について開きなおるといえるか、自分なりに納得してしまうところがあります。結局、やたらに自分の立場を認めてもらいたい

ばかりに、種々の保健活動を実施する傾向にありますが、基本は来室した子どもに真剣に相手をする姿勢が大事だと思います。

ちなみに、養護教諭は授業をしない先生ということで職務内容の問題点は消えないでしょう。20年前の問題点と現在の問題点は全く変わっていません。

中学校から小学校へ移りました。

●新任のときが中学校で、登校拒否、非行、緘黙の子、精神分裂の子、タバコ、シンナーなど、いろんな問題をもった生徒と関わってきました。独身の頃でもあり、体当たりで生徒にぶつかっていったのは、自分自身のためにもよかったと思います。

しかし、結婚し家庭をもつとそうもいわず、幼い子をかかえては生徒への関わりがどこかで切れてしまう。また、切ってしまうないと、家庭へしわよせがいき、仕事と家庭の両立に疲れてしまうことがありました。中学校では、とくにそういった問題が多いのではないのでしょうか？

今年4月、小学校に初めて勤務となりました。最初迎えてくれたときの歌声に感動し、涙ぐんでしまいました（中学生になると、何度も叱られてやっと声が出るという状況でしたので…）。中学校のときのような精神的疲労はなくなりましたが、小学校の児童との関わりは、また違った面でむずかしいようです。

また最初から勉強のやりなおしです。

小規模校から

●県で一番小さい学校で、僻地校です。児童数本校10名程度、分校数名。本校には校長、教頭、養護教諭、学級担任数名、分校担任1人、給食婦1人の構成メンバーです。

養護らしい仕事はせず、事務と雑用でおまわされています。養護教諭は学校では責任をもつ仕事はなく、雑用をしていけばよいという感じですが、つまらない毎日です。小さい学校のせいもあると思いますが、担任だけいけばよいという感じですが。学歴も教養課程で一般教諭と同じ4年制にし、同一歩調で役職につけるようにしたほうが差別されないと思いま

す。

●小規模校のため、管理職の出来、不出来で、学校全体のカラーがすぐ変わってしまう。それが保健面でも、すぐ影響してしまう。

子どもの心が一番に考えられない人は、上に立ってほしくない。

●小規模校なので、細かいところまで指導することができ、その面では満足している。悩みといえば、校内で管理職と用務員さんを除く職員の最年長の立場にあり、来校者の接待や女性教師の悩みの相談にのることが多く、力量不足を感じることだ。

図1 調査対象者の年齢（平均35.3歳）

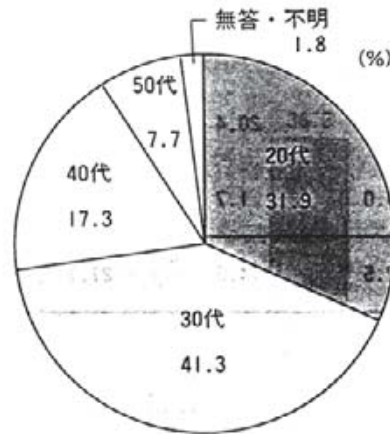


図2 学歴×年齢

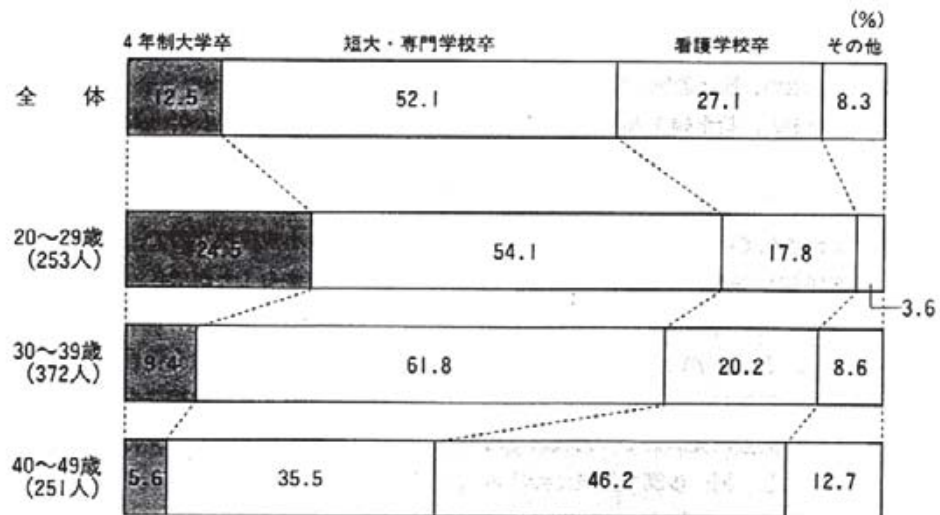


表1 養護教諭になった年齢

| | 20歳 | 21歳 | 22歳 | 23～25歳 | 26歳～ |
|----------|------|------|------|--------|------|
| 4年制大学卒 | 0.0 | 0.0 | 62.7 | 21.8 | 5.4 |
| 短大・専門学校卒 | 62.8 | 20.4 | 8.8 | 5.9 | 2.1 |
| 看護学校卒 | 0.0 | 1.7 | 51.3 | 31.1 | 15.4 |
| 全体 | 32.5 | 14.0 | 27.7 | 16.7 | 7.8 |

無答・不明は除く

図3 養護教諭以外の職歴の有無

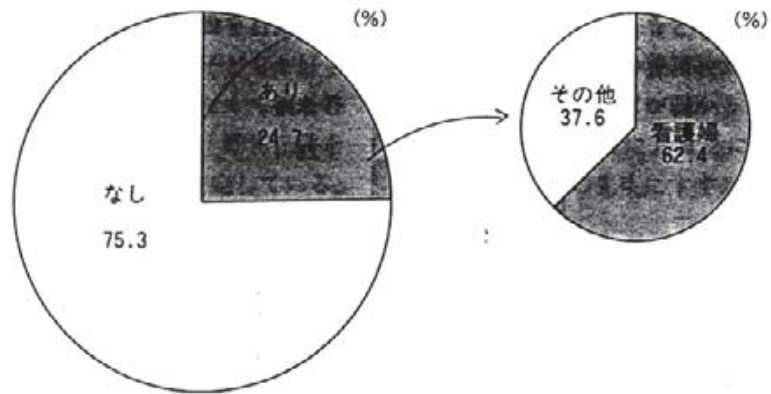


図4 養護教諭以外の職歴のある人×年齢

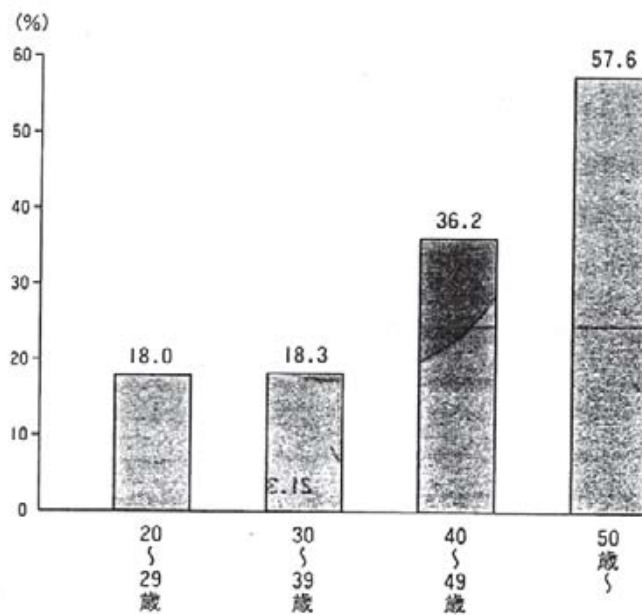


図5 既婚か、未婚か

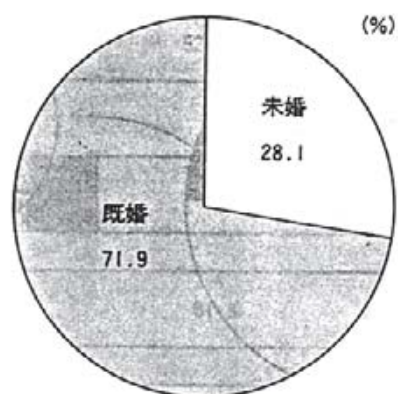
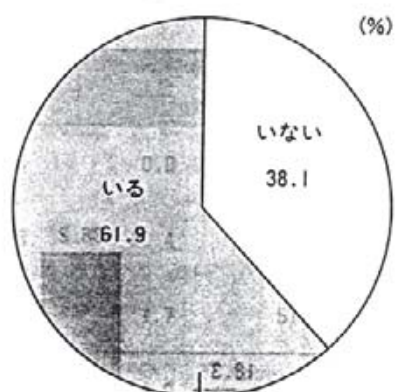


図6 子どもの有無



↓

| | |
|------|-------|
| 1人 | 21.3% |
| 2人 | 58.6 |
| 3人 | 19.0 |
| 4人以上 | 1.1 |

■ 養護教諭を選んだ理由 IIII

養護教諭を職として選んだ理由を自由に答えてもらったところ、中では「子どもが好きだから」「医療・看護の仕事がしくて」と答えた人が多かった(表2)。また、勤務条件をあげた人も多い。「養護教諭は安定している、一生勤められる、女性に向いている」などや「看護婦をしていたが夜勤が続けられなくて

養護教諭になった」などである。そのほか、「自分が学生の頃の養護教諭にあこがれて」「小さい頃、からだが強かったのでよく保健室に行き養護教諭にお世話になった」「先輩や、親、学校の先生にすすめられて」というのも見られる。

表2 養護教諭を選んだ理由

- 子どもが好きだから
- 医療・看護関係の仕事がしくて
- 結婚しても続けられそうなので。一生続けられそうなので、女性に向いている
- 子どもの頃の養護教諭にあこがれていた。好きだったから
- 子どもの頃、養護教諭にお世話になったので
- 学校にあこがれていた。先生になりたかった
- 担任がなく、授業や評価をせず子どもとふれ合えるから
- 健康な人を相手にしたかったから
- 看護婦は勤務条件が厳しく続けられなかった
- 先輩(恩師、母、父、職場など)にすすめられて

■ 養護教諭の一日 III

養護教諭の日常を見るために「昨日の一日」を振り返ってもらったのが次のデータである。図7が示すように、まず朝学校に着いた時刻は、8時前後が最も多く、7時46分から8時15分の間に出勤した者が66%。7時45分以前に出勤している者は17%とわずかである。また学校を出た時刻は、図8が示すように、4時半から6時の間が7割。6時以降の者は17%で、多少学級担任よりは在校時間が少ないようである。これは年齢層が若いためかもしれない。

学校で保健室の中にいた時間は平均で5時間45分、職員室にいた時間は平均で2時間47分であった。

また保健室が一種の離島化しているという声も聞くので、クラス担任などとの接触の機会をみるために、「昨日一日で何人の先生と会話をしたか(簡単なあいさつは除く)、また一日で何人の子どもと会話をしたか」をたずねたところ表3のように、他の先生とは平均10人、子どもとは(保健室の中と外を合わせて)40人くらいと接触している。

図7 養護教諭の一日

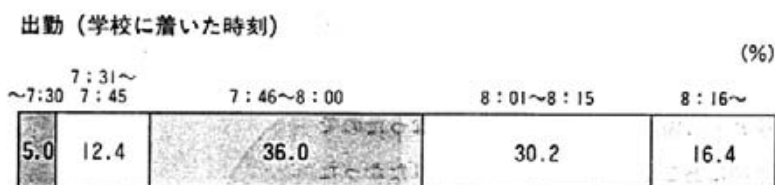


図8 学校を出た時刻

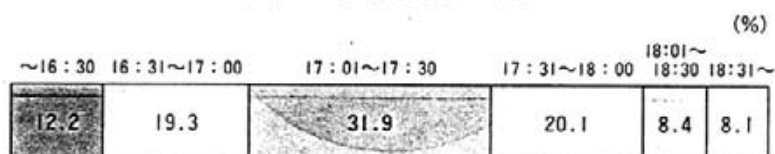


表3 一日に何人と会話をしたか(平均人数)

| | |
|------|--------------------------------------|
| 先生と | 10.1人 |
| 子どもと | 41.2人 { 保健室の中で 21.8人 保健室の外で 14.8人 |

■ 養護教諭の仕事 III

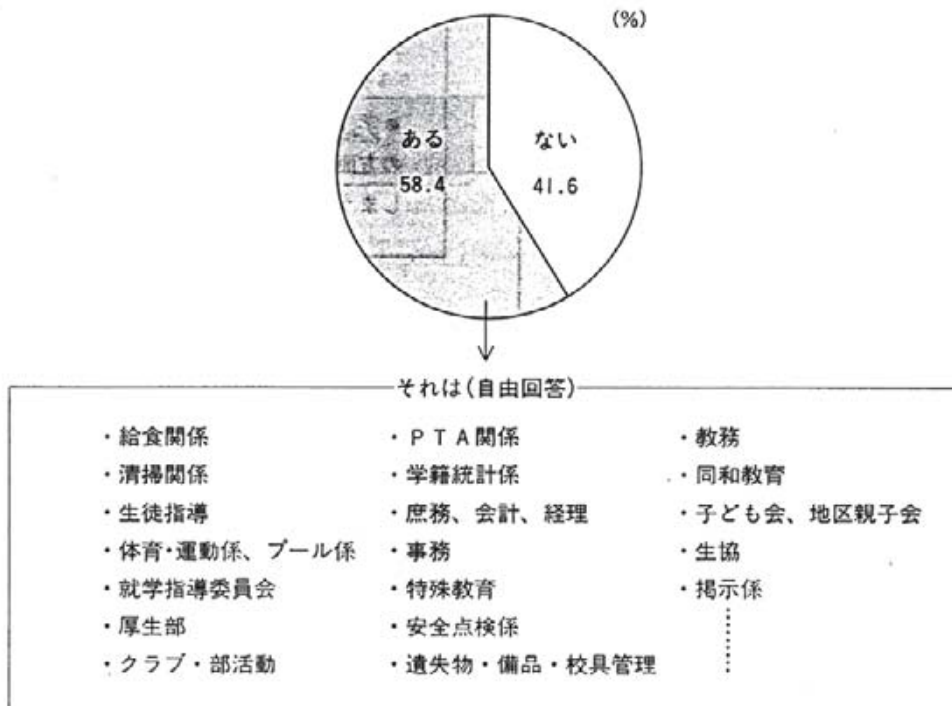
養護教諭の仕事は、学校教育法により「児童（生徒）の養護をつかさどる」と規定されている。しかし、その職務については特に定められていないため、あいまいでわかりにくいと言われている。養護教諭の歴史をみると、学校看護婦として明治37年に誕生し、その職務も救急看護に限定されていた。その後名称は何度か変わって、昭和23年の学校教育法の制定で養護教諭と呼ばれるようになった。今日、養護教諭は医療以前の健康問題を主として扱っているので看護の知識を必要とするが、それ以外にも教育者としての職務も要求されている。

養護教諭の仕事は、保健室の運営管理にはじまり、定期健康診断の実施、学校の保健活動や相談活動など、多岐にわたる。さらに学

校で保健活動以外の校務分掌をも担当している人は、図9のように58%と過半数を超えている。具体的にどのような仕事を担当しているか自由回答してもらったところ、週番・日直当番の他に、会計、庶務、給食関係、清掃、体育、用務、生徒指導、飼育栽培、PTAなどさまざまである。とくに給食関係、清掃を担当していると答えた者が多かった。しかも小規模校の場合、教師数の不足から1人の教諭がさまざまな校務分掌を担当しており、養護教諭もその例外ではないのだろう。

また「学校の仕事を家に持ち帰ってすることがあるか」との問いに対して「よくある」(16%)、「ときどきある」(30%)となっている(図10)。合わせて半数の養護教諭が自宅にまで学校の仕事をもち込んでいることになる。

図9 保健や相談以外の校務分掌



そして、養護教諭の99%が「保健室だより」を発行しており、図11が示すように中では「子どもと保護者」あてに各々別の内容で出している者が57%で最も多い。発行する割合は、表4が示すように月1回が最も多くなっている。

校務分掌が多すぎます。

●熱心にやればやるほど、自分自身の負担がどんどん多くなり、平日は夕方7時すぎまで、休日に出勤しても、なお追いつめられている現状で、ゆとりが全くなくつらい（今のところ家事を他人まかせにできるのでやれていると思う）。

この地区は、養護教諭が給食の献立関係をやるものとされており、献立、材料購入計画、各業者発注伝票作成、調理員との連絡、各調査報告書の作成等々、学校給食関係の校務分掌が多く、とても大変である（とにかく、この仕事は養護教諭しかやった経験がないため、管理職をはじめ他の教職員に全く理解がない）。

今後、給食関係の負担を少なくして、本来の学校保健関係の仕事に全力がそげられるようにしていきたい。

●プールが始まり、一日に何時間かはプールの監視と虫とりなどでくぎづけとなり、おまけに4時～6時半頃までは、社会体育の部分であるはずのスポーツ少年団の指導があるため、勤務時間内に十分仕事ができない。平日、学校に7時くらいまでいるため、体力の消耗がひどく、帰宅後は休むだけの毎日になりがち（自分の研究や執務の時間が他の養護教諭の2分の1くらいなのでは…）。

●部活動の監督をまかされており、毎日の練習に、かなり負担を感じている。日曜も月に1回しか休みにしていないため、

自分の時間があまりない。もっとゆとりをもって仕事に取り組みたいと思う。

●野外活動、とくに自然学校（5年生）における養護教諭の参加の仕方について問題を感じている。

●本来の保健室の仕事以外の仕事が多すぎる。例えば、国語、道徳などの研究授業のための係会に出たり、学年会に出たり、自分の仕事が思うように進まない。

事務量をへらしてください。

●教育困難校といわれる学校で、学校でのお母さん役をつとめることも多く、児童数も多いので十分子どもと話をする時間がないし、事務処理にかなりの時間をとられ、どうにかして事務量をへらす工夫はないものかと考えています。

●仕事の要領が悪いためか、毎日、書類整理に追われている。

●学校内に事務職がないので、そちらの方面の仕事に時間がずいぶんとられてしまう。

職務内容で迷っています。

●スキンシップを求めてくる児童「シップをはって」とか、「カットバンちょうだい」に対して、どこまで受け入れてやるべきかが、今かかえている悩みです。

●小学校5年生頃から、性に関する問題が多く、指導上どのようにすればよいか悩んでいる。

●食生活ひとつとっても、コマーシャルの浸透で、こちらの話は「はなし」で終わってしまうようなむなしさを感じます。

●従来取り組んできた健康問題が個人のプライバシーとか子どもの人権ということで否定されてきて、養護教諭も何をすべきなのか少しわからなくなってきている。

学校ではあくまでも学習が主体で、健康問題まではなかなか手がまわらない。担任も忙しすぎて、こちらのことには十分耳を傾ける心の余裕がないようである。

●保健室は、学校の中で自分の居場所がない子にとっての逃げ場所であるとか、子どもたちが安心できる場所などといわ

れている。学生時代、私もそのような保健室、養護教諭をめざそうと思い、この1年は、児童（の訴え）をとにかく受け入れようと思い、接してきたつもりだ。

1年たった今、確かに本校の児童の多くは、保健室に行きにくいという子はいないと思うし、保健室は安らげる、私と話をしにきたという理由で来室する児童もいる。

けれど、保健室に来れば授業がサボれるという意識の子も数名いる（来室理由を聞いた）。保健室に来る子の訴え（なんとなくだるいなど）を、どこまで受け入れていいものか。そもそも、子どもを受け入れるということはどういうことなのか、といったことが、よくわからないでいます。

図10 学校の仕事を家に持ち帰ってすることがあるか

——約半数が家で学校の仕事をしている——

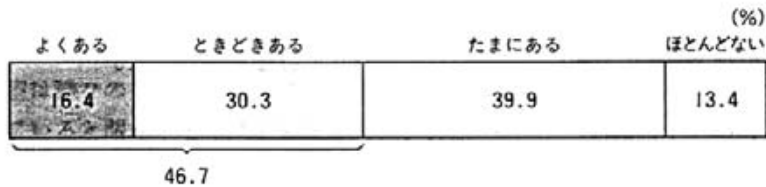


図11 「保健だより」を出しているか

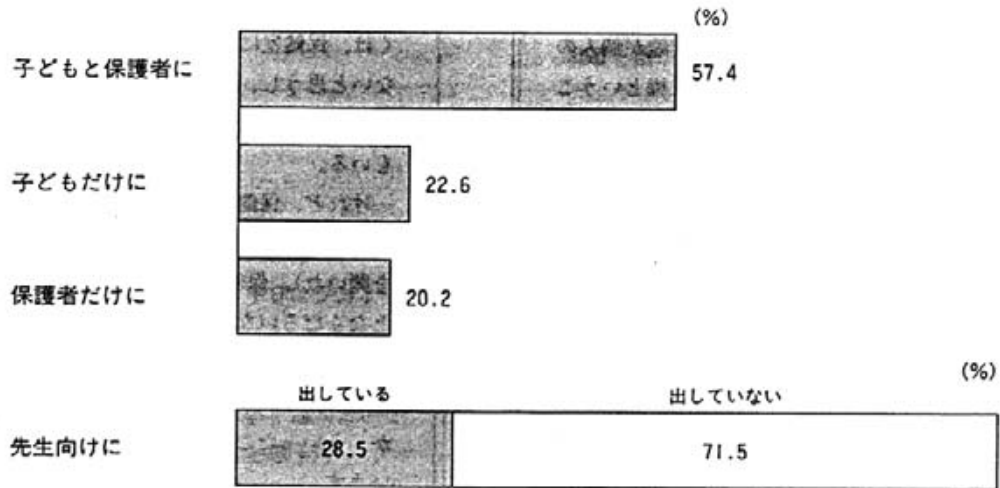


表4 「保健だより」をどのくらいの割合で出しているか

| 対象者 | 出している (%) | | | | |
|--------|-----------|------|------|-----|------------|
| | 年1回 | 学期1回 | 月1回 | 週1回 | 不定期 その他 |
| 子ども向けに | 0.7 | 4.9 | 77.0 | 0.9 | 16.5 |
| 保護者向けに | 2.4 | 11.7 | 67.8 | 1.0 | 17.1 |
| 先生向けに | 7.7 | 23.7 | 17.0 | 1.8 | 49.8 |

2. 保健室に来る子ども



■ 保健室の利用状況 III

最近の保健室は種々の目的をもった子どもたちであふれていると聞く。実際にどんな子どもがどのくらいの人数、保健室を利用しているのだろうか。ここでも「昨日」という聞き方で、できるだけ実態に近い数字を拾い上げようとした。

図12と表5が示すように、昨日一日に保健室を利用した子どもの数は1枚あたり平均で

30人であった。来室した理由をみると、表5に示したように病気4.5人、ケガ6.6人に対して、遊びやただ話をしにきたという子どもが8.2人、またそれ以外の理由で9.9人と、ケガや病気でない子どもたちもけっこう保健室にやってくるのがわかる。ではどのような子どもたちがよく保健室に来るのだろうか。

図12 昨日一日に保健室へ来た子どもの人数(平均30.0人)

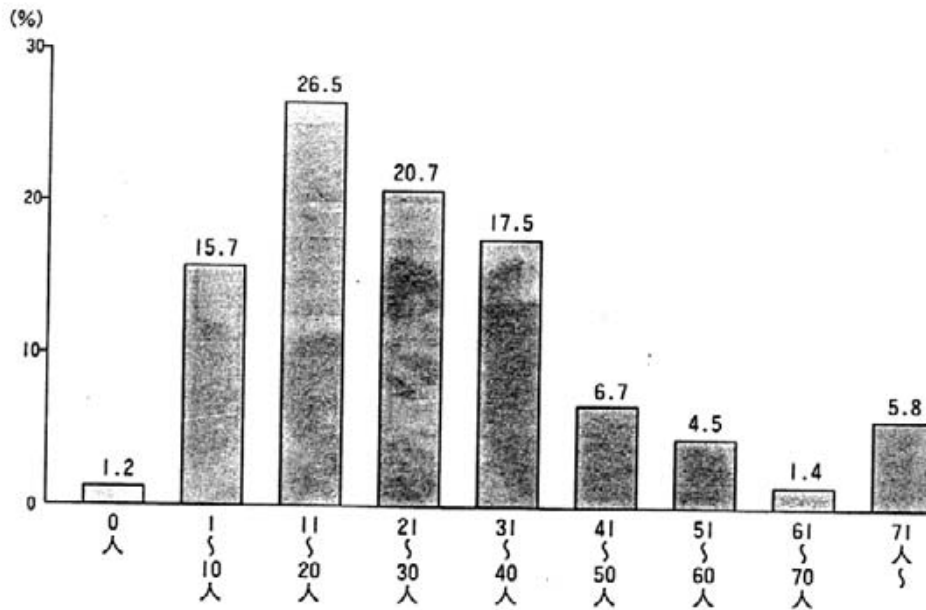


表5 保健室に来た子どもの来室理由 (平均人数)

| | |
|---------|-------|
| 病気で | 4.5人 |
| ケガで | 6.6人 |
| 遊びや話をしに | 8.2人 |
| その他 | 9.9人 |
| 合計 | 30.0人 |

■ 保健室によく来る子ども IIII

まずよく保健室を利用する子どもの学年は、図13が示すように病気やケガのために保健室に来る子どもは低学年が多く、ケガや病気ではないのに保健室に来る子どもは、圧倒的に

高学年が多い。高学年になると、心やからだの悩みが増え、相談や話相手、または逃げ場を必要とする子どもが増えてくるのかもしれない。

図13 保健室によく来る学年

| | 低学年 | 中学年 | 高学年 | 全体 |
|--------|------|------|------|------|
| 病気やケガで | 25.8 | 16.4 | 11.1 | 46.7 |
| 遊びに | 10.4 | 14.9 | 55.5 | 19.2 |

■ 子どもからの悩み相談 III

養護教諭は子どもからどのような悩みごとを持ちかけられるのだろうか。子どもの悩みの中で代表的と思われる6つの項目についてたずねてみると(図14)、最も多い内容は「友だちのこと」で、「相談を受けることがある」と答えた者の割合は「よく・ときどき・たまに」を合わせると84%。養護教諭の4人に3人は子どもから友だちのことで相談を受けたことになる。「よく・ときどきある」に限っても37%となる。次に相談された回数が多いものは「男女交際や性のこと」「先生のこと」が共に58%と続く。

これをさらに「よくある」の数値に限ってみていくと、最も相談されない内容は「性格、家庭問題」で、他は「友だちのこと」8%を筆頭に「男女交際のこと」「先生のこと」「勉強のこと」などだが、比較的相談されにくいこうした項目についても「よく相談される」はいずれも4%。つまりこのくらいの割合で積極的にカウンセラー役割を担っている養護

教諭がいるとみてよいかもしれない。

これらの相談を学年(図15)、男女別(図16)にみると、悩みごとの相談にやってくるのはいずれの問題にせよ、学年別では高学年。しかも圧倒的に女子が多いことがわかる。なお、これらの相談の多さを成績別にみたが、特に関連は見られなかった。

担任と子どもの板ばさみです。

●学級担任との関わり、子どもとの板ばさみになり、子どもを守れないときがあります。また「言わないでね」という子どもの言葉に対して、担任にどう伝えればよいのかがまだわからなく、なさげなく思うことがあります。逆に、元気な子どもの姿を見たとき、明るい声をきいたときに、とてもうれしく感じられます。

図14 子どもの悩みの相談

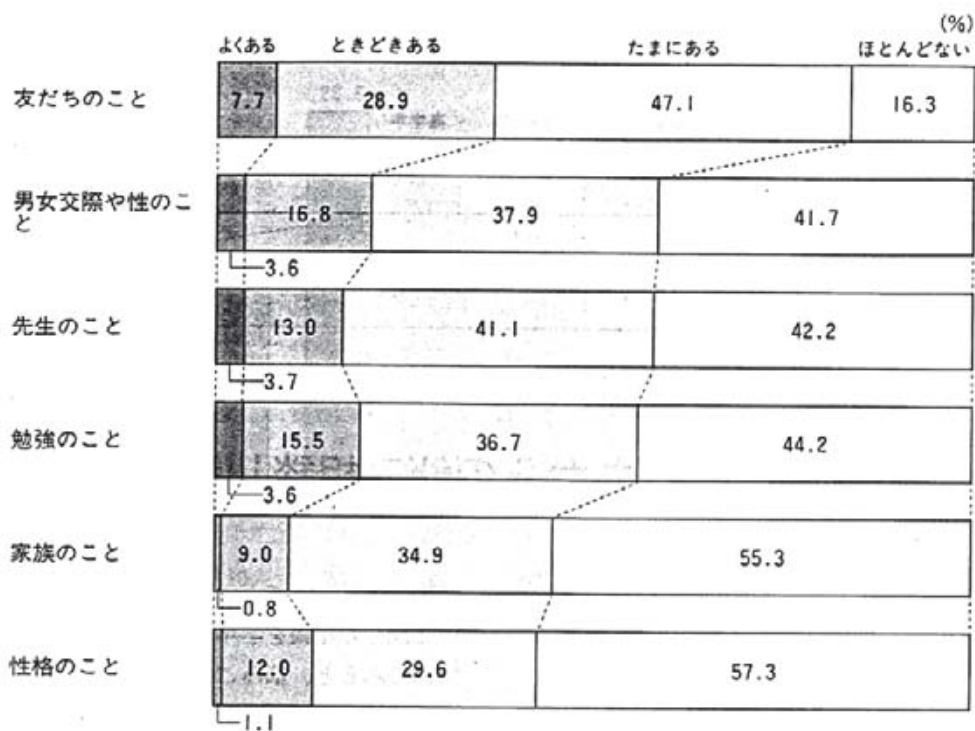


図15 子どもの悩みの内容×相談の多い学年

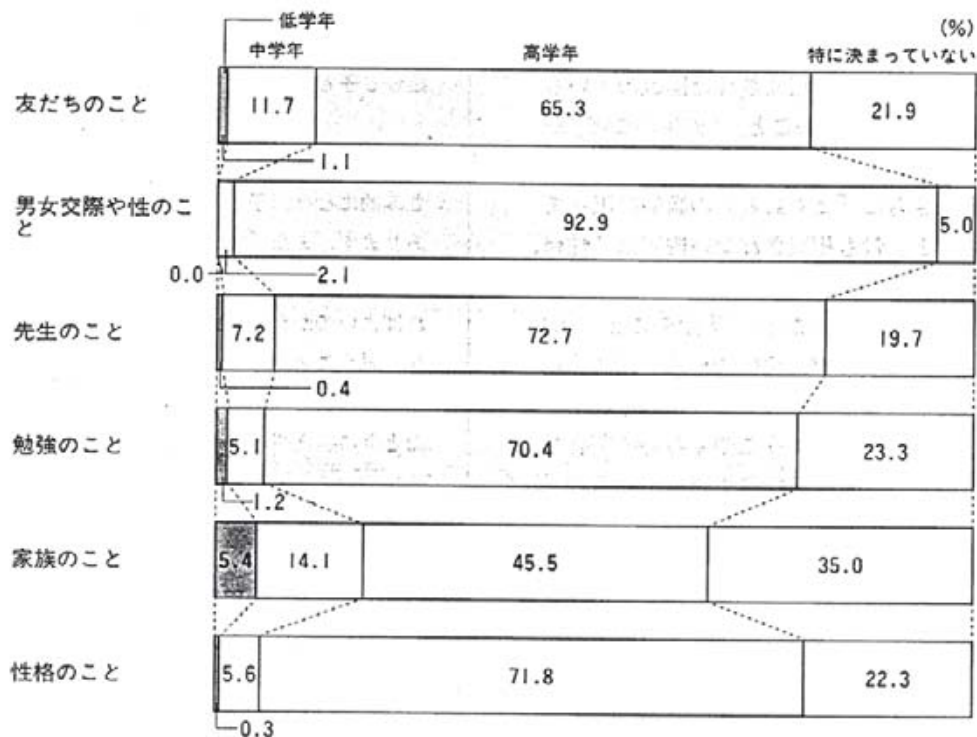
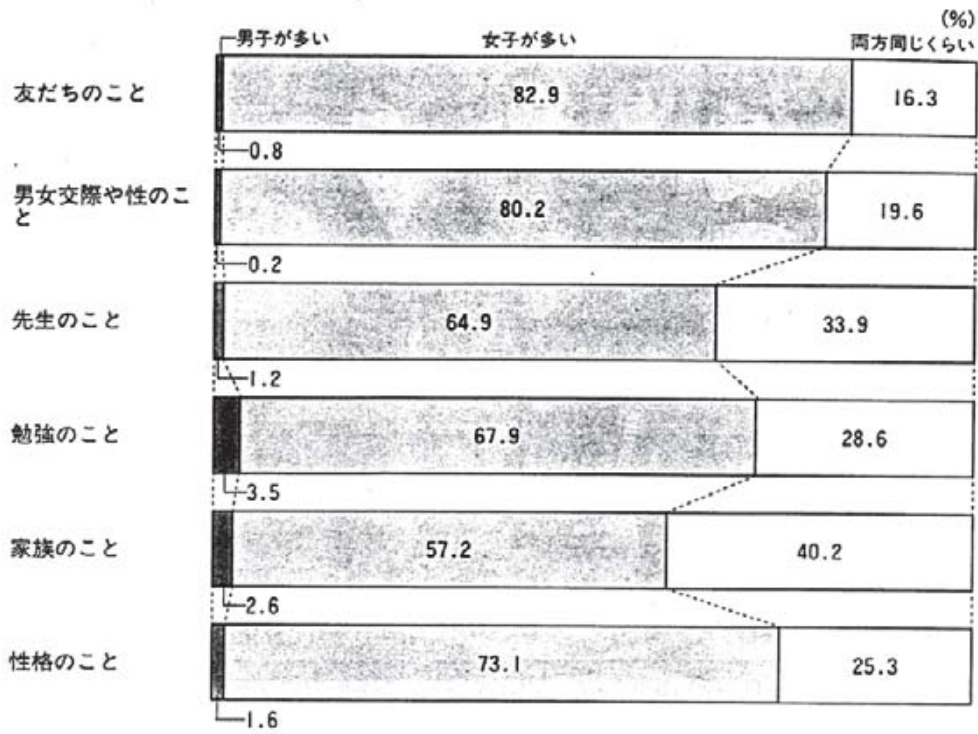


図16 子どもの悩みの内容×男女どちらが多いか



3. 問題をもった子どもに関わりたいか



■ 意欲の有無 III

子どもたちの中で生まれるさまざまな問題行動に対応しているのはおもに学級担任であるが、養護教諭はからだの問題だけでなく、こうした心の問題にもどのくらい関わりたいと思っているのだろうか。図17は養護教諭が「自分が中心となって担任にも少し関わってもらいたい」と積極的な姿勢を示した項目順に並べてある。最も値の大きかった項目は、「理由もなく毎日のように保健室に来る子」56%で、次に養護教諭中心型が多かった項目は「病弱な子」で、47%。他は1割かそれ以下にすぎない。やはり担任中心の指導・対応を支持する姿勢がみられる。このことは他の項目でもっと顕著である。例えば、「身体的な理由でいじめられている子」の対応については「自分が中心となって」と回答した養護教

諭は9%にとどまり、「担任が中心となって」と考える養護教諭のほうが87%とはるかに多い。同様に「登校拒否の子」の対応についても、養護教諭中心型が2%に満たず、担任中心型が88%と圧倒的である。また「乱暴をふるう子」についても養護教諭中心型0.8%、担任中心型79%であった。そして、「学校外の専門家にまかせるほうがよい」と答えた者は、多い順に「緘黙の子」(12%)、「学習障害の子」(6%)、「登校拒否の子」(3%)だが、いずれも数値は小さく、子どものことは学校内でとくに担任が中心となって対応すべきだと考えている養護教諭が多いようである。

また年齢との関係を図18で見ると、身体的問題については、看護婦経験者が多いせいか50代が最も積極的で、40代以下では高学歴者

3.問題をもつ子どもに関わりたいか

の多い若い層が意欲的であることがわかる。されなかった。
他の心理や学習面では年齢との関係は見いだ

図17 問題をもつ子どもにどれくらい関わりたいか

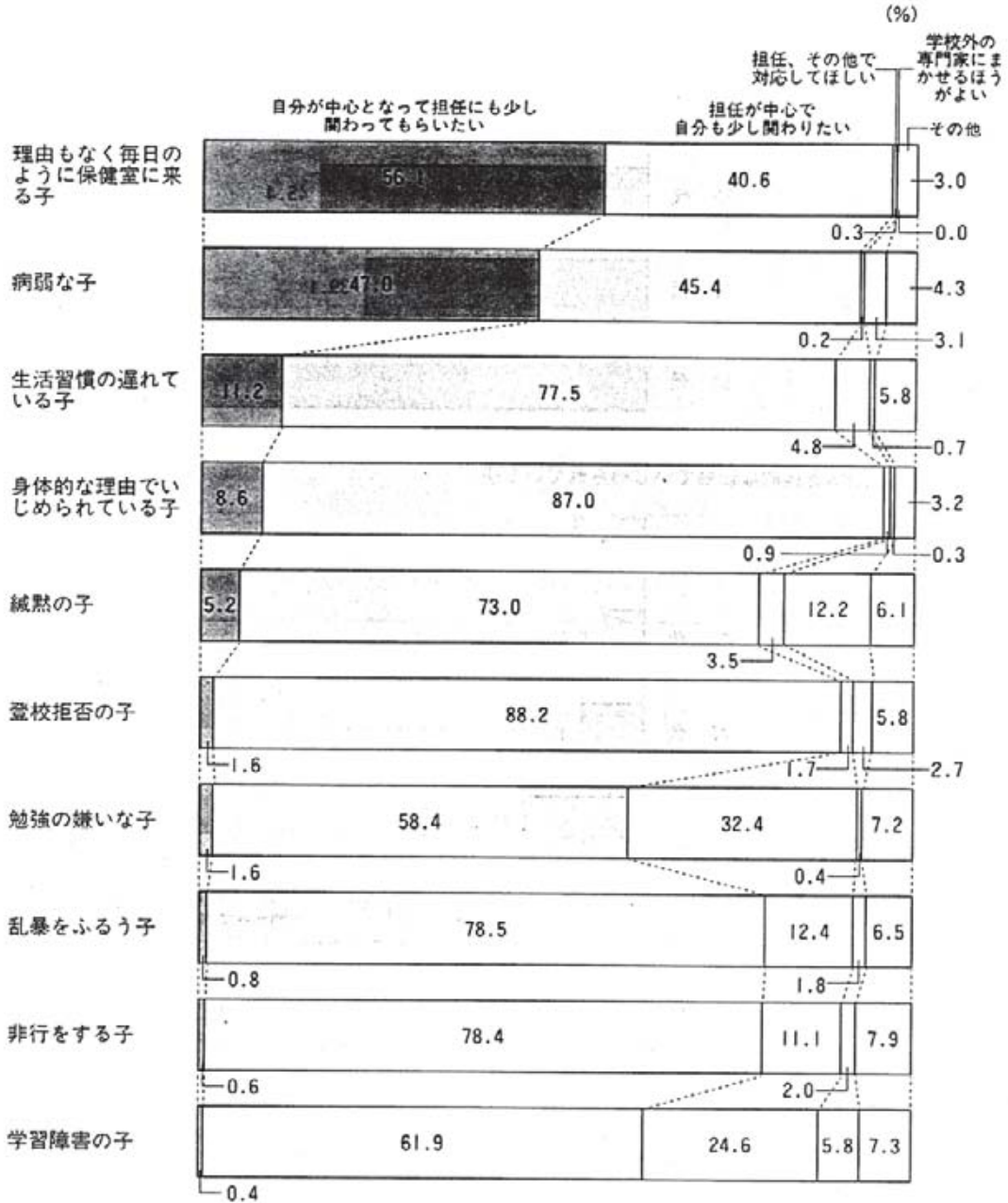
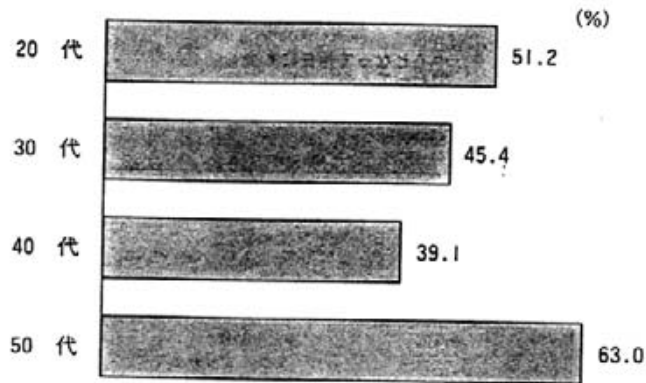
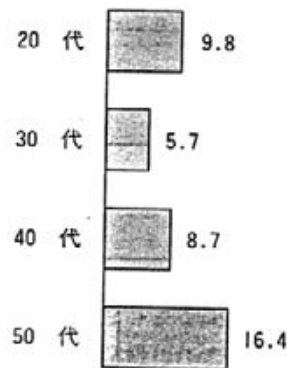


図18 問題をもつ子どもにどれくらい関わりたいか×年齢

<病弱な子>



<身体的な理由でいじめられている子>



「自分が中心となって担任にも少し
関わってもらいたい」割合

■ 自信の有無 III

こうしたそれぞれの問題への対応意欲は、次の「問題をもつ子どもの対応に関してどのくらい自信がありますか」と関係がありそうである(図19)。「理由もなく毎日のように保健室に来る子」の対応については、「大いに・

わりと自信がある」と答えたのが38%、「病弱な子」への対応は34%、「生活習慣の遅れている子」18%、「身体的な理由でいじめられている子」26%、「登校拒否の子」は13%と少なくなる。

図19 問題をもつ子どもの対応に関する自信

| | 自信の有無 (%) | | |
|--------------------|--------------|------|-------------|
| | 大いに・わりと自信がある | 少しある | あまり・全く自信がない |
| 理由もなく毎日のように保健室に来る子 | 37.6 | 44.0 | 18.4 |
| 病弱な子 | 33.5 | 47.7 | 18.8 |
| 身体的な理由でいじめられている子 | 25.7 | 47.4 | 26.9 |
| 生活習慣の遅れている子 | 17.9 | 46.8 | 35.3 |
| 登校拒否の子 | 12.7 | 34.7 | 52.6 |
| 乱暴をふるう子 | 9.1 | 29.4 | 61.5 |
| 非行をする子 | 8.3 | 27.4 | 64.3 |
| 緘黙の子 | 8.2 | 27.5 | 64.3 |
| 学習障害の子 | 5.0 | 19.1 | 75.9 |
| 勉強の嫌いな子 | 4.9 | 27.8 | 67.3 |

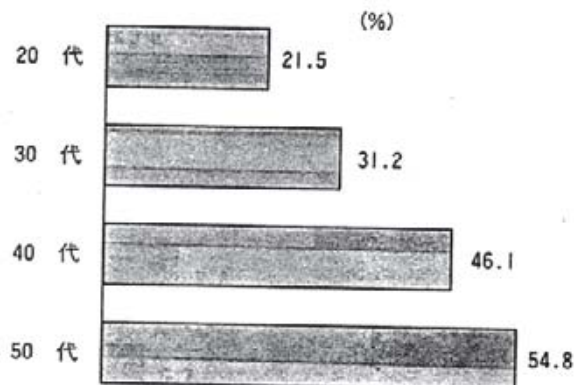
このように自信をもって対応できると答えた割合の多い項目は、養護教諭中心に対応したいし、自信のない項目については担任やそのほかにまかせたいとする傾向がみられる。また図20に示したように、身体的問題に関していえば、年齢が高くなるほど自信がつくが、

他の問題については年齢との関連はみられない。今後、養護教諭に問題をもった子どもの対応を望むのなら、それらの問題に対する養護教諭の研修プログラムが必要であろう。

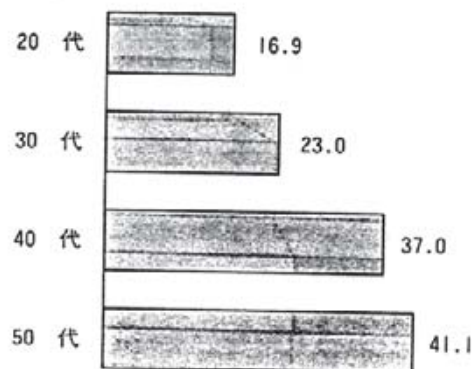
また、図21で性教育の取り組みについての意識をたずねたところ「初潮指導（女子に）」

図20 問題をもつ子どもの対応に関する自信×年齢

<病弱な子>



<身体的な理由でいじめられている子>



「大いに・わりと自信がある」割合

3.問題をもった子どもに関わりたいか

には積極的な姿勢がみられ、57%が「自分が中心となって関わりたい」と回答しているが、その他の項目については、「担任が中心で自分も少し関わりたい」と答えた消極的な者が多かった。しかし面白いことに図22に示したように性教育については、20代の者のほうが30

代以上の者より積極的に参加を望んでいることがわかる。また50代以上も意欲をもっているようである。

図21 性教育への関わり

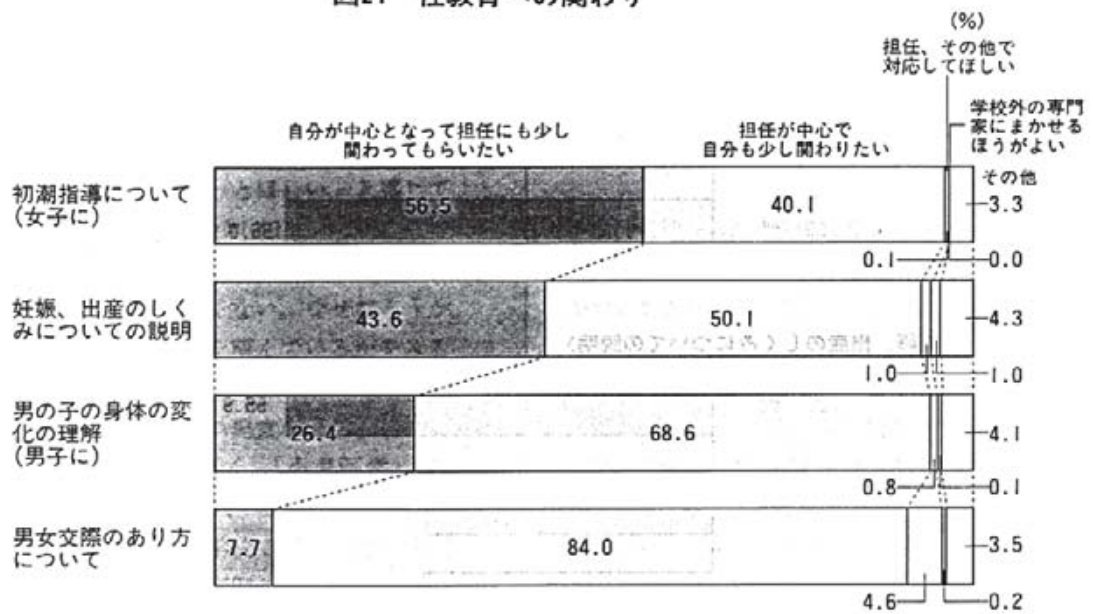
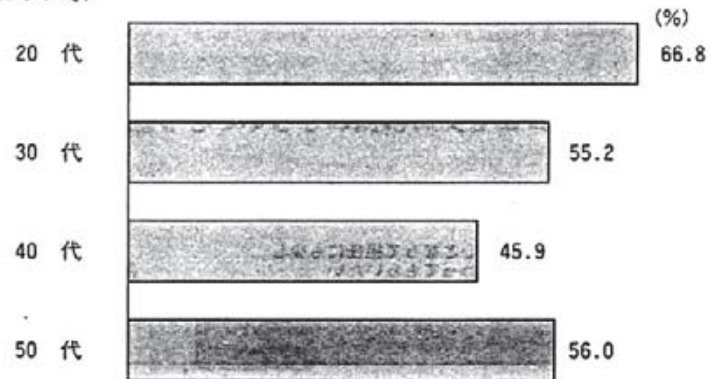
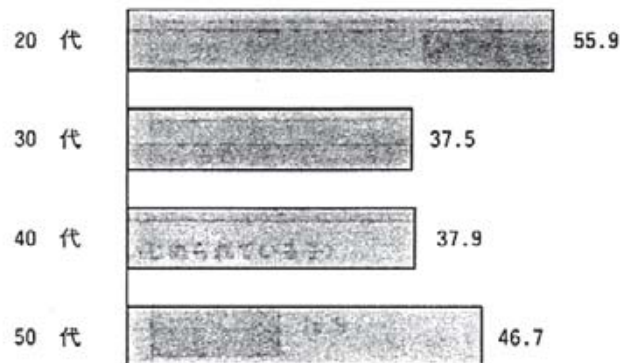


図22 性教育への関わり×年齢

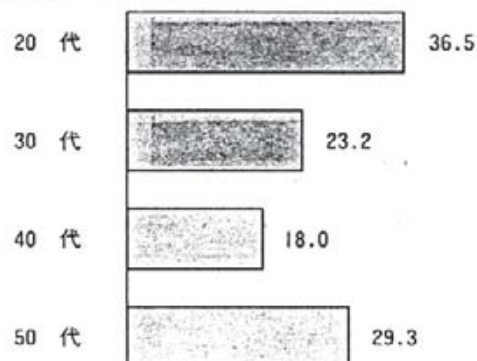
〈初潮指導について〉



〈妊娠、出産のしくみについての説明〉



〈男子の身体の変化の理解〉



「自分が中心となって担任にも少し関わってもらいたい」割合

■ 研修について III

子どもの引き起こすさまざまな問題に対する一般教師の研修システムは次第に充実していく傾向にある。しかし養護教諭の研修は時間的には代替要員がいないため、参加しにくいという声を聞く。クラス担任であれば自習とか、管理職や専科の教師に指導を依頼して勤務中に研修に出ることも不可能ではないのだが。ではこのような研修へのニーズはどのくらい強いのだろう。図23に示したように「校外での研修の機会がもっとほしい」と感じている養護教諭は38%、「少しほしい」34%、「そう思わない」28%とほぼ3分の1ずつである。思ったよりその声は高くない。なぜだろうか。

それではどんな研修を望んでいるかをみると、図24に示したように1位が「カウンセリング」(61%)、2位が「児童心理学」(44%)と心の問題に関心が高く、「小児医学」(33%)、「小児保健」(27%)、「看護技術」(14%)などを上回っている。学校で実際に心の問題と考えられる子どもの事例が増えてきていることが理由のひとつだろう。また、その他としては性教育、学校保健、スポーツ医学、救急法などの記入があった。またこれを学歴と年齢別でみると表6、表7に示したように、全体としては高学歴の者のほうが研修意欲が大きい。これは若い世代に高学歴者が多いことから、多少年齢(経験)差も反映しているかもしれない。また年齢との関わりをみると、20代では他の世代より看護技術の不足を感じており、同様に小児医学も若い世代のほうが研修を望んでいる。

これらの研修へのニーズについては、後の仕事上の悩み・問題点のところでもあげられている。例えば「研修に出かけたいが、養護教諭が学校に1人のため空けられない」「もっと研修や研究の機会がほしい」などである。また養護教諭がほとんどの学校に1人のため「同僚と高め合うことができない」「相談する

人がいない」「わかり合ってくれる人がいない」などの悩みもある。養護教諭の難しい現状では、養護教諭が他の学校の養護教諭と連絡をとりやすくしたり、研究グループをつくるなど外部との接触を密にすることが必要だろう。

医療知識と技術が不足しています。

●山間僻地校のため医療機関までが遠く(50km)、1時間半ほどかかりますので、救急の対応が不安です。

●教育相談、性教育などにもっと取り組みたい。今は教育相談のよき指導者に恵まれ、職場である程度取り組めるが、時間が不足する。応急処置の正しい方法をもっと知り、身につけたい。

●養護教諭には看護婦の免許が必要だと思っているが、近年養成所を出た方が多い。少し悲しい感じがする。

●養護教諭は医学百科事典のように、質問されたら何でも答えなければならないので、大変です。

●応急処置の本や病気についての本などたくさん出ているが、実際それらを読む時間がないので、具体的な講義、または研修があればいいと思っている。

●1校1名という職種から、自分に対して相当厳しい意識をもたないと、甘えから執務がおろそかになりがち(自分の問題です)になってしまう。

短大卒のため、医療面(一番必要な知

識)での知識が乏しく、今、大変勉強したい(できれば、准看の人と一緒に看護

学校の夜間に通いたい)。

図23 研修の機会がほしいか

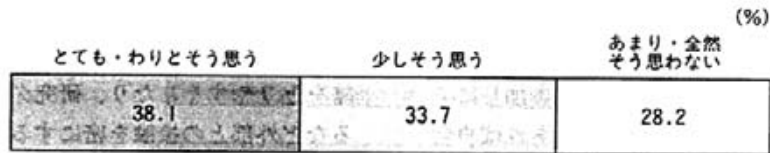


図24 どんな研修をしたいか

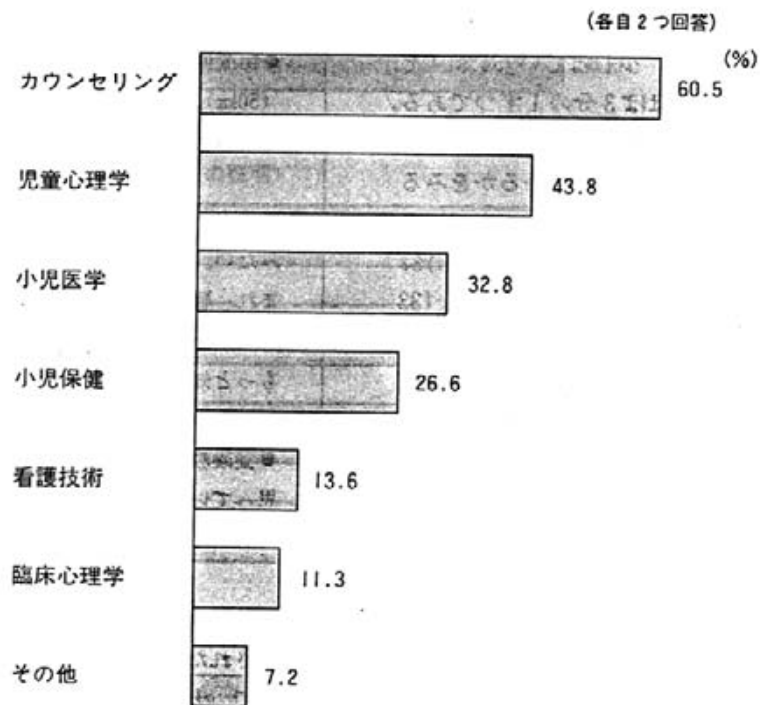


表6 どんな研修を受けたいか×学歴

(%)

| | 4年制大学卒 | | 短大・専門学校卒 | | 看護学校卒 |
|---------|--------|---|----------|---|-------|
| カウンセリング | 66.3 | > | 60.4 | > | 57.0 |
| 児童心理学 | 74.0 | > | 56.9 | > | 46.0 |
| 小児医学 | 42.3 | > | 33.7 | > | 30.9 |
| 小児保健 | 29.8 | > | 26.9 | > | 25.1 |
| 看護技術 | 14.4 | < | 17.8 | > | 7.2 |
| 臨床心理学 | 6.7 | < | 12.8 | > | 12.1 |

表7 どんな研修を受けたいか×年齢

(%)

| | 20代 | 30代 | 40代 | 50代 |
|---------|------|------|------|------|
| カウンセリング | 64.6 | 55.8 | 66.9 | 57.4 |
| 児童心理学 | 37.4 | 44.2 | 51.2 | 45.6 |
| 小児医学 | 36.6 | 37.0 | 24.1 | 19.1 |
| 小児保健 | 25.6 | 25.7 | 27.7 | 32.4 |
| 看護技術 | 18.3 | 14.6 | 6.6 | 10.3 |
| 臨床心理学 | 9.3 | 11.9 | 12.7 | 10.3 |

○印は最大値

4. 学校の中の養護教諭



学校の中で養護教諭は、他の学級担任や専科の教諭とやや違う立場にいるため、担任との人間関係がうまくいかないとか、学校内で孤立している、といった声を聞くこともある。

とくに意欲的で活動的な養護教諭ほど他の教師とぶつかりやすいとも聞く。実際はどのようなだろう。

■ 保健室の設備などについて IIII

図25に示すように、設置場所については55%くらいがほぼ満足と答えている。それでも「とても場所が悪い」17%、「わりと場所が悪い」10%、合わせて27%の数値を無視してはいけないうだろう。これに比べると設備などの

不足を感じている学校が多いようである。ほぼ満足している者は38%にすぎない。「とても不足している」20%、「わりと不足している」17%、合わせて37%となっており、その内容は表8のようになっている。

図25 保健室の設備などについて

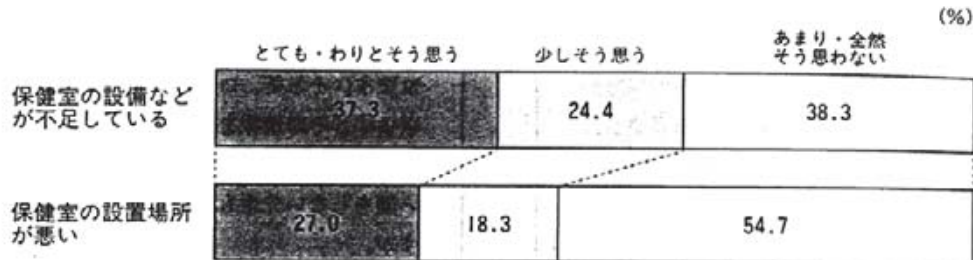


表8 不足している保健室の設備

| | |
|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> • 広さ • 収納スペース（戸棚、本棚） • 器具すべてが古い • 湯わかし器、ガス • （外線）電話 • 冷暖房 • 冷蔵庫 • 足洗い場 • 流し台、水道 | <ul style="list-style-type: none"> • 医薬品 • 消毒設備 • 保健教育用品、書物 • 検査室、診察机 • コンピュータ • ベッド • 救急用備品 • 救命用具 • 健康診断用の器具 |
|---|---|

■ ストレスや孤独感をめぐって III

図26によれば「他教師との人間関係がうまくいっていない」（とても・わりとそう思う）とする積極的肯定派はわずかに6%にすぎず、「少し」を合わせても、24%でしかない。「保健室にいて孤独に思うことがある」者も11%（「少し」を合わせても35%）とわずかである。全体としてはとくに養護教諭であることからの不適応状態は感じられない。次いで「朝出勤したくないと思うことがある」は18%（「少し」を合わせて50%）と数値はやや上がってくるものの、これは他の教師でも似たような状態なのではなかろうか。また「ストレスが多い」の45%も同様に見てよいだろう。

次に少し話題は違うが「学校が保健活動を軽視している」とする者は19%だが、「少し」という弱い肯定者を含めると52%となる。「学校の中で、養護教諭の立場が弱い」は28%（「少し」を合わせると57%）で、漠然とした不満の所在は指摘できるかもしれない。これを自由回答の中からの声をひろってみると、例えば「管理職が保健活動を重視してくれない」「学校全体を動かすのが難しい」「養護教諭の職務がはっきりしていないため、中途半端で何でも屋になっている」「養護教諭の立場が不安定で、権威がない」などとなる。養護教諭は担任や授業をもたないため、学校内では特

殊な存在にみられやすく、それを負担に感じていることを忘れてはならないだろう。

担任との関係をめぐって

●何年仕事をしてきても、担任教諭とのギャップは越えられない。学校は授業が全てであり、授業優先で動いているのでその他のことは(保健面などは)、よほど強気に訴えないと受け入れてもらえないところがある。自分自身の力量不足を感じている。

これから先、養護教諭としては、とくに保健指導に力を入れなければならないと思う。

保健(とくに性教育)が教科に加えられることを望んでいます。

●所用で教室に行くと、子どもたちが集まってきて、おんぶにだっこをせがまれる。(1、2年まで)可愛い!!と思う。おしゃれをしておかねば…。教師の話、子どもの事情など、きいていて涙もろくなった自分に気づき、反省。無気力からくる登校できない子どもと関わっているが、自分が落ち込みそうになる。

クラス担任がかわると、今まで保健室によく来室していた子どもがぱったり来なくなり、担任というフィルターを通しての関わりがおもしろく、またたよりなく感じることもある。

●特定のクラスの子ばかりが来室して困惑してしまうときがあります。なぜでしょう。

●私の学校は健康教育を推進しています。健康は「走ることからだ」なんて考えをもった男の先生方が多いのですが、小さいときからあまり走らせないほうがよいと思います。スポーツ障害が出てきてい

るのに無視している現状です。正しい方法を見いだそうとせず、あそこの学校でやっているからやるといった具合です。

私の周りによく児童が集まってきてくれます。そして、いろいろな話をしていきます。その情報をもとに担任とも話ができています。あまり集まりすぎて、いい顔をしない先生もいらっしやるようですが。

●教師はいろいろな考え方ができる頭の柔軟性がある人になるべきだと思うが、その反対のタイプが多い。今まで尊敬できる教師に会ったことがないのが残念だ。

1人ですし、昇任の道が開かれていないし、待遇改善から取り残されています。

●養護教諭の意欲をはばんでいるもののひとつに、他教師のように出世? 例えば、教務主任、教頭、校長になる道が開かれていないことがある。いくらがんばっても、優秀でも、それよりずっとひどい一般教師が自分たちの上に立ち、管理されることに矛盾を感じるし、そのことが養護教諭を一般教師より、下にみるひとつの原因でもあると考える。

いろいろ子どものために尽くしても、担任の成果になることが多い。いつも、どんなことも、自分のためにしていることではないが、むくわれないことが多すぎると思う。

●養護教諭は定年になるまでヒラである。ということは、今の学校組織の中にあっては、いつまでも若年層と同じ半人前なのである。こんなことで、仕事に熱意をもち続けられるのだろうか?

●養護教諭は忙しく、どの人も病んでい

ます(心が疲れすぎています)。校内に同職がいなだけに忙しいということは口に出さないし、理解も得られない養護教諭に対する職場での改善ということがなかなかされないことに、将来への希望がなくなることがあります(他の教諭の待遇改善がとどんななされているだけに思っています)。

●学校での職種として1人であり、同僚と仕事の内容で高め合うことができないので、なかなか進歩がない。

しかし、今後はますます「環境の問題」から私たち生物の「健康」が重要視されてくると思われる。子どもたちへの自分たちの健康の保持増進の意識を高めるための健康教育が必要であると思っているので、とてもやりがいのある職だと思っている。

今後は、他の先生方に上手に働きかけて、子どもたちの未来のために努力していきたい。

●学校に1人しかいない職種なので、心から悩みを打ち明けきいてもらえる人がいないので、ストレスがたまる。また、立場がよわいので、組織活動として、保健活動をすすめるににくい。保護者も、ともしれば健康問題より勉強を重視するので保健活動をすすめるににくい。

●雑務が多く、子どもたちと話す機会が少ない。いつもイライラしてしまう。話し合える人も少ない。他校の養護教諭と意見交換することが一番楽しい。

保健主事のシステムをめぐって

●保健主事が1年か2年で交替するので、新しい保健主事を育てることばかりで、

スタッフとして力を発揮してもらえることが少ない状態が続いている。

●保健主事制度が弊害になっている。養護教諭が主任になれない(保健主事が主任となるため)。

専門的知識は、養護教諭が普通教諭(保健主事)よりもっているので、保健主事の下に養護教諭がある今の管理体制はおかしい。

保健主事撤廃!

管理職の姿勢が大きいのです。

●1校1名で、管理職の姿勢が大きく左右される場面が私たちの仕事の中には数多くありますが、幸いに理解ある人に恵まれ、どうか職務を遂行しております。

●管理職の締めつけで、仕事がやりにくいことがよくある。めんどろで無駄な仕事をいつけられる。担任によっては、子どもをかかえきってしまい、こじれることがある。

●職場での人間関係に不安をもっている。管理職への信頼がもてない。思ったこと、感じたことを言葉にできず、いつも口を閉じてしまう。言っても無駄だと思ってしまった。

●管理職の理解がなく、お茶くみ、プリント刷りなどを頼まれることがある。

「担任は忙しい」とあてつけのように言われたりする。

●管理職が保健教育に関して知識・意識が低いように思われる。私が臨時(産休代替)ということもあってか、雑用的なことも平気でやらせようとするのがあ

る。

細部に干渉するわりに、全体的な見通しが甘い。口では「養護教諭は大事だから」と言うが、そのわりに発言させたがらない、外に出したがらない（校外研修など）という矛盾がある。

養護教諭はその学校の管理職の考え方で、不当な扱いを受けることもある。学校保健に対して認識が甘いと養護教諭が養護教諭としての機能を果たさず名前だけの存在になりかねない。また、そのような管理職のもとにいる一般教諭までが、養護教諭を一段下に見下したような態度を平気でとるようになる。

1校1名ということもあり、強い態度に出るとたたかれ、長いものに巻かれていると存在が活かされない。このような教師社会の中で、夢と理想を削りとられ、可もなく不可もなくといった安穏な生活を自らするようになるかと思うと怖い気がする。きっと私はたたかれながら、雑草のようにたくましくなるのだ。上ばか

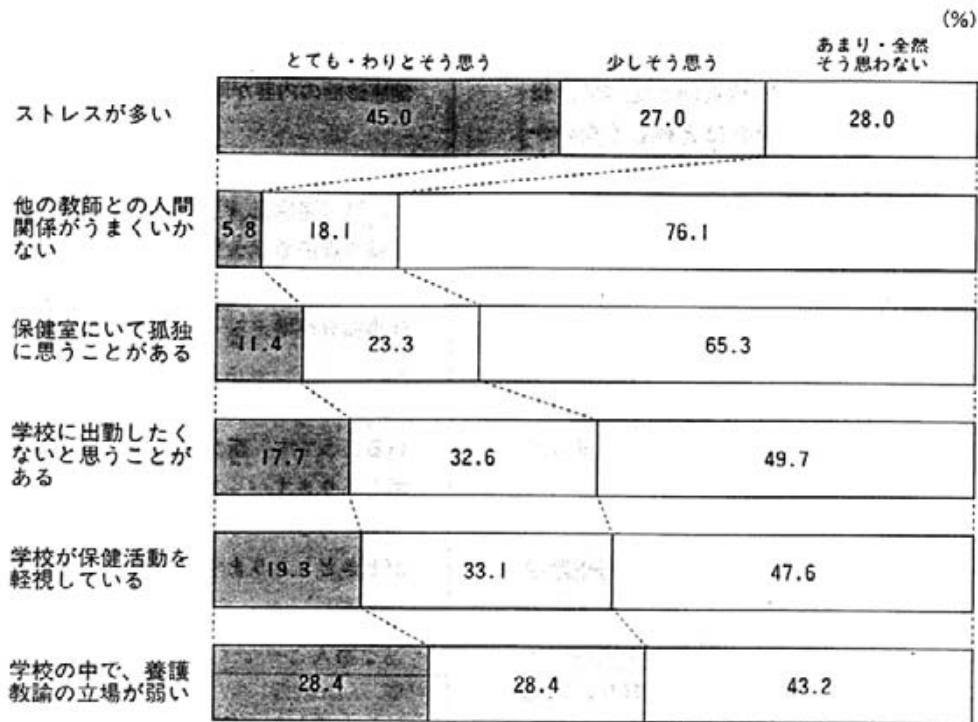
り見ていると雑草の存在すら気づかなくなる。

保健室の機能が理解されていません。

●今の子どもたちを取り巻く背景を考えると、保健室の機能の多様化と重要性を痛感するが、一般にはなかなか理解されないようである。仕事を終えてもむなしいことが多く、若い人に養護教諭になリなさいと声を大きくしてすすめたくない心境である。とくに最近の職制などを考えたとき、養護教諭は教育の枠外にはずされていくのではないかと危惧される。

●保護者の中には私たちを看護婦さんとか保健婦さん呼ばわりをして、「養護教諭」の名前すら知らず、不快な思いをすることがある。

図26 ストレスや否定的感情



■ とにかく忙しいのです IIII

一般的なイメージとしては、養護教諭の職務内容は、学級担任や専科教師と比べて、母性的イメージがあり、それほど難しくないかのように思われている。しかしこの点については思い違いがあるようだ。図27に示したように「担任より仕事が楽だ」を積極的に肯定する者は14%にすぎず、否定率は61%と他項目と比べても極めて高い。さらに「保健室の仕事が多すぎてゆとりがない」と思っている者は45%に達する。しかし「保健室に来る子どもが多すぎて1人1人対応できない」と思っている者は22%にすぎず、つまりは子どもへの対応より「保健室だより」を発行したり、各種統計をとったり、あるいは他の職務や雑用に近い役割の比重が大きいのだろう。また自由回答の中から声をひろってみると学校の規模によって仕事の内容が異なっており、大規模校では、「子どもの来室する時間が重なり1人1人にじっくり対応できない」「仕事量が多くて複数の養護教諭が必要」という意見が多かった。一方、小規模校では「他の校務分掌をしているため保健の仕事だけに集中できない」という意見が多くみられる。

健康診断の内容が問題です。

- 学校に医学的領分が多くなってきている。例（諸検査、予防接種）

親の責任で行うものまでが教育の場に入り、今までの分が減っていないので、仕事領分が増える一方である。

- 年々、健康診断の内容も変わってきているようです。新たに加えられる健康診断もありますが、ここまでの必要性が本当にあるのだろうかと疑問に思うことがときどきあります。

忙しすぎます、複数の養護教諭を。

- 子どもとゆっくり話をする時間がない。病気やケガの処置だけでなく、心に問題をもつ子どもたちが多くなり、担任に相談されたり、話をしたりする。このよう

図27 忙しさ

| | (%) | | |
|--------------------------|-------------|--------|--------------|
| | とても・わりとそう思う | 少しそう思う | あまり・全然そう思わない |
| 保健室の仕事が多すぎてゆとりがない | 44.6 | 27.7 | 27.7 |
| 学級担任の先生よりは仕事が楽だと思う | 13.8 | 25.0 | 61.2 |
| 保健室に来る子どもが多すぎて1人1人対応できない | 22.3 | 24.3 | 53.4 |

に仕事が多くなってきている。また、報告文書なども多く、時間にゆとりがない。

少し休憩をとりたいと思うが、なかなかとれない。給食時に食べる直前まで子どもに対応し、食べてすぐ動く。すぐ動かないで休みたいと思う。

●全校200名程度の小さな学校ですから1人1人のことがよくわかり、来室した子どもにも時間や手をかけて接することができます(それでも忙しいですが)。これ以上、児童数が多くなると、やはりやりたいことができなくなり、子どもをサバクといったことになってきます。学校に養護教諭が1人なんて、現実の子どもの問題の多さからいっても異常なことではないでしょうか。

●保健、健康というのはかなり個人のレベルの問題で、プライバシー、人権など

と相反するものがあり、集団として取り扱うことに限界を感じています。個のニーズに答えるには、養護教諭が1校に1人ではむずかしいものがあります。

●児童数約1,000人に対して養護教諭1人なので、たえず仕事に追われているような気がする。来室児童に対しても、ゆっくりと話を聞き、落ち着いて対応するという訳にいかないことも多く、申し訳ない気持ちです。

●定期健康診断中は仕事に追われ、ゆとりがなく、子どもたち1人1人の話をゆっくりと聞いてあげられない。大規模校、養護教諭の複数配置を願う。

●休み時間、来室者が多すぎて対応できない。

■ 養護教諭の役割をめぐって III

まず図28で見られるように、「学校にもスクールカウンセラーが必要か」をめぐって見いだされる意見は積極的肯定者が43%にもものほり、「少し」を合わせると肯定率は72%にも達している。しかも「養護教諭が子どもの悩みの解決にもっと関わるべきだ」とする者も31%、「少し」を含めると肯定率は78%にもものほる。しかし自由回答の中では、専門的知識や判断力に不安を感じている、あるいは問題をもつ子どもに対する対応について悩んでいる、という意見もあった。また、救急処置に不安をもったり、保障問題をあげた人もいる。医療行為は行わないものの、学校内では医療の専門家とみられているため、いざというときの不安も多いようである。医療補助的な仕事

も十分にこなす自信がないのに心の問題まで……、しかも何の専門的教育や訓練も受けていないのに、と考える人も少なくない。

そのためには校外研修が必要であり(38%、「少し」を含めると72%)、「校内に複数の養護教諭がほしい」(29%、「少し」を含めると49%)と思っている人もいる。しかしそれよりも望まれているのは、図29が示すように「学級担任ともっと話し合いの機会がほしい」(52%、「少し」も含めると80%)、なぜならそれは「それぞれの子どもについての情報をもっとほしい」(同52%、80%)であり、すなわち「担任は問題のある子どものことを養護教諭にもっと相談してほしい」(同35%、75%)という声になる。

そして何よりも印象的な数値は図30に示したように「自分は養護教諭の仕事が好きである」64%（「少し」を含めると84%）という数値の高さである。しかも自由記述で、仕事上の喜びをたずねたところ表9のように「つらいことがあっても子どもの笑顔を見ていて吹き飛んでしまう」「子どもが元気な姿を見せてくれるときが最高」「子どもから声をかけられたとき、相談されたとき」のような記述が多く、また「卒業生が訪ねてきてくれることが楽しみだ」という声も多かった。そして仕事上の成功をあげた人も少なくない。「保健活動の働きかけが評価されたとき」「子どもに変化がみられたとき」「研究成果を発表できたとき」などである。

これからの養護教諭のあり方は図31が示すように「心の問題と身体の問題を同じくらいウエイトで」とする者が95%にもものぼる点を比べ合わせると、養護教諭というこの意欲的な人々にわれわれはもっと期待の幅を広げてもいいのではないか。

医師や心の問題を扱う専門家を1校1人置いてください。

●現代の子どもに多い疾病は多様化しているし、また専門医へ行っても治らない。生活様式や食文化の変化によるものと思われるが、今後、このような病気がますます多くなるだろう。社会問題として早く手をつけていかないと大変なことになると思う。

心の健康をそこなっている子どもの指導については、やはり専門家が学校に1人はいて指導すべきだと思う（非行、不登校の子どもなど）。

●一般の人が考えている以上に養護教諭の仕事は多種、多様である。全てをこなす、かつ、人間的にいろいろなことにたずさわるには、とても確立した人格が必

要である。しかし、現状ではそのような人が養護教諭になるのはまれである。そうであれば、やはり1,000人からの子どもを集めているのだから嘱託の学校医を設置するとか、カウンセラーを常駐させるとかの方法のほうが、より建設的である。養護教諭は必要ない。

こんなときが養護教諭の喜びです。

●健康相談をしていて、子どもから「先生と話をしていると『心のマッサージ』をしてもらっているようだ」と言われたとき、働きがいを感じた。また、痛みを和らげてもらった（手当てを受けた）後の子どもの安心したような顔や笑顔にふれるとき、それが喜びとなる。

●「学校教育」そのものの矛盾とおそろしき、不安などを強く感じるようになった。瞳の輝いている子どもが少なくなった。

個々の子どもたちが背負っている家庭、社会がみえるだけに心が痛むことが多い。またその中で、自分なりに負けずに生きている子どもたちに出会うと涙が出る。

「先生、明日も学校に来るんだろう。あ～よかった!!」私の一番のなぐさめの言葉でした。

●健康教育というか、もっと直接指導をしたい。ときどき、学級担任の出張の折などに保健指導に出向くと、とても楽しく、子どもたちも自分のからだのことに興味をもち参加してくれ、私の喜びとなっている。しかし、カリキュラムにないことというのはむなしい。好きなことができるというダイナミックさはいいいのですが……。

●子どもたちの問題を担任の先生と一緒に考えていきたいという気持ち強いが、なかなか話し合う時間がとれないことが悩みです。しかし、カウンセリング、心理劇などの研修を重ね、その経験を生かしながら保健室での相談活動はずっと続けております。美大への夢を保健室で生かし、保健室を学校の中のどこよりも明るく、楽しく、ステキな場所にして、いつも音楽をきいたり、手話をしたり、折り紙をしたり、健康について話し合ったりしています。毎日が子どもたちとのす

ばらしい出会いと心のふれ合いですごくいくことが喜びです。養護教諭という仕事を続けていけるということに、今は誇りをもっています。

●もうすぐこの学校ともお別れなのです。「先生ずーといて」とか、「先生の行く学校に行く」とか、子どもにとって私が必要なのだという声を聞くと悲しくなりますが、うれしい一言です。

図28 学校と精神保健

| | とても・わりとそう思う | 少しそう思う | あまり・全然 そう思わない |
|----------------------------|-------------|--------|------------------|
| 学校にも、心の専門家(スクールカウンセラー)が必要だ | 42.7 | 28.8 | 28.5 |
| 養護教諭が、子どもの悩みの解決にもっと関わるべきだ | 31.1 | 47.0 | 21.9 |
| 学校に複数の養護教諭がほしい | 28.5 | 20.7 | 50.8 |

図29 養護教諭としてのニーズ

| | とてもそう思う | わりとそう思う | 少しそう思う | あまりそう 思わない | 全然そう 思わない |
|-----------------------------|---------|---------|--------|---------------|--------------|
| 学級担任ともっと話し合いの機会がほしい | 16.5 | 35.6 | 28.0 | 17.7 | 2.2 |
| それぞれの子どもについての情報がもっとほしい | 20.9 | 30.9 | 28.5 | 18.8 | 0.9 |
| 問題のある子どものことを養護教諭にもっと相談してほしい | 11.4 | 23.4 | 40.0 | 23.4 | 1.8 |

図30 養護教諭という仕事が好きか

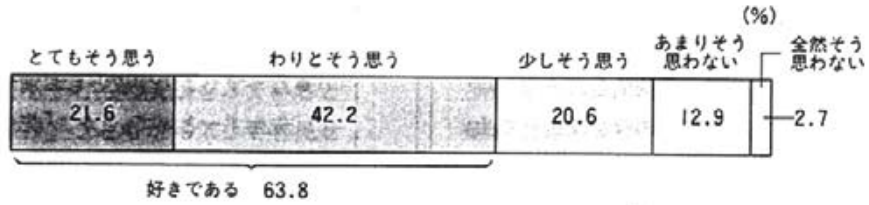
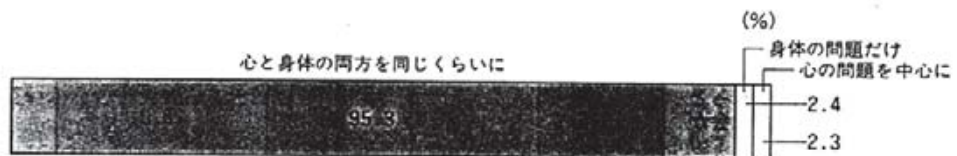


表9 仕事上の喜び

- 子どもとふれ合っていくこと、声をかけてくれること
- 子どもが自分を必要としてくれること
- 子どもが元気な姿を見せてくれること、変化が見られること
- 卒業生が来てくれたり、手紙をくれること
- 保健活動が評価されたり、効果があったとき
- 保健だよりが評価されたとき
- 自分の創意工夫で仕事ができること
- 子どもや保護者から相談されたとき
- 研究成果を発表できたこと

図31 養護教諭の今後の役割



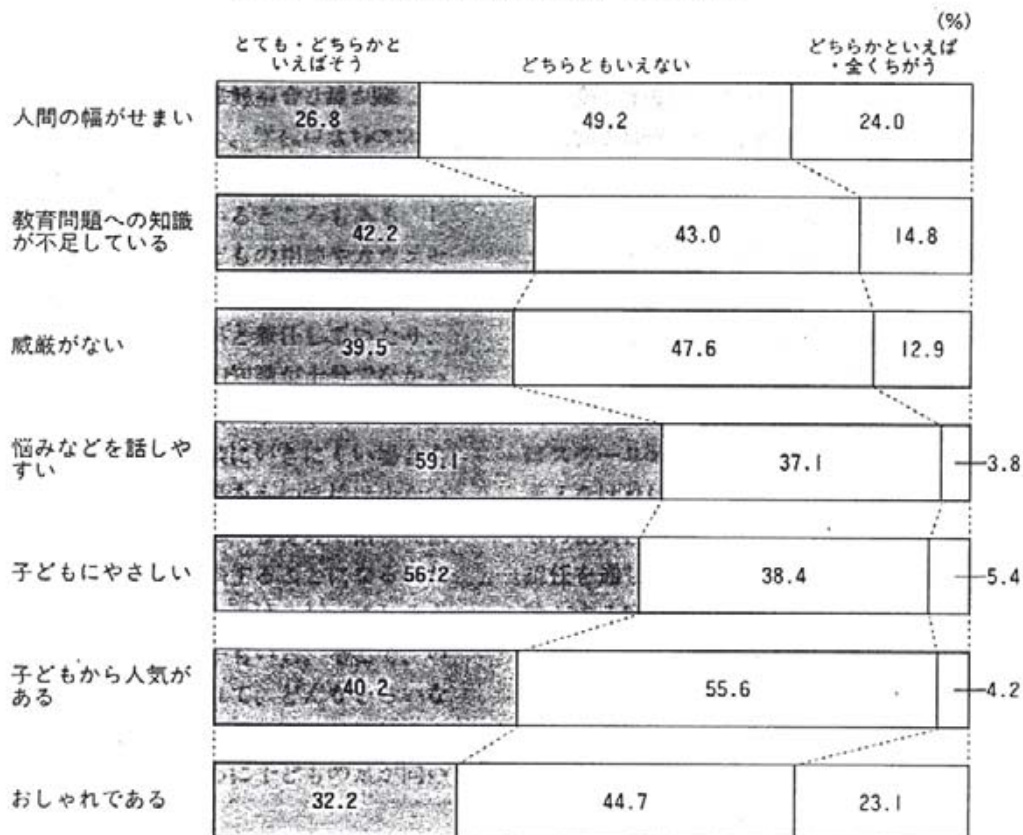
■ 自己評価 III

最後に自分と同じくらいの年齢の学級担任と比べた場合の自己評価をみてみよう。図32に掲げたように、人間の幅がせまいと思っていないものの、教育問題への知識がやや不足していて、威厳がないと評価する傾向がみいだされる。知識の不足を肯定する者は42%だが否定する者15%を大きく上回り、威厳のなさについても肯定する者40%、否定する者13%と差がある。それがすでに指摘したような研修意欲や養護教諭の役割の拡大への意欲と関連してくるのだろう。

そうした自分の多少の自信のなさとは逆に「悩みごとなどを話しやすい」(肯定者59%、

否定する者4%)、「子どもにやさしい」(同56%、5%)、「子どもから人気がある」(同40%、4%)の点については、大きな自信がみられる。こうした母性的養護に支えられた「子どもから人気のある自分」の意識が、知識のなさや威厳のなさに関する問題点の自覚にもかかわらず、「心の悩み解決にも関わるべきだ」「身体の問題と心の問題とに同じくらい関わるべきだ」という積極的な声になって出てくるのであろう。確かに他人、とくに教師から受け入れられない場で伸びる子はまれで、「教師—子ども関係」は子どもが「先生を好き、先生は自分のことに個人的に関心をもつ

図32 同年齢の学級担任と比べて自分は



てくれる」と感じるかどうか教育や心理治療の基本であると考えられる。そうした意味では、とかく母性的配慮にまで手が回らず、どうしても「目標達成的なリーダー」として行為しがちな学級担任に対して、養護教諭の果たすべき役割は大きい。複数養護教諭制と養護教諭が心の問題をも取り扱えるように校外研修の十分なシステム作りが望まれるところである。

教師としても通用する養護教諭でありたいのです。

●先生方の授業について理解できて（教師の資格をもって）、そしてなお、養護教諭という職務につければと思う。それしかできない（ナース、保健婦の資格はあるが）というのは、とても心理的に負担である。例えば、担任が養護教諭の代わりをしても（不在のとき）、その逆ができない、など。

夜間、または通信教育で大学教育を受けたいと思うが、家庭もあり、今は忍耐。いつか自由な時間がとれるようであれば、

何歳からでも勉強したいと思う。

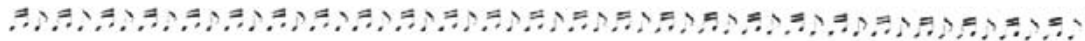
●社会的に養護教諭は4年制大学出身と同じ資格をもちながら、職種として低くみられる傾向がある。教諭として同格の地位を確立したい。

●養護教諭自身の仕事としてのやりがいや楽しさはある。全校の子どもたちのことがわかるため、どの担任とも話が合うし、子どもたちもとても慕ってくれている。しかし、私自身、養護教諭としての誇りをもてないのが悩みである。医療面の知識不足や事務的な仕事の多さ、教師間の中途半端な立場などから感じている。

●養護教諭としての専門知識をもっともって得て、子どもだけでなく、教師からも頼られるようになりたい。

●子どもと話す時間はかなりあるほうだと思うが、親と話す機会が少ない。

親と話し合いができるような力量を身につけたい。



おわりに

あわただしい現代の社会で、子どもたちのかかえる悩みも複雑になってきている。学校の中で、保健室が唯一の憩いの場だと感じている子どももいる。しかし担任や他の先生方の中には、子どもが保健室に行くことを望ましくないと考える人もいる。保健室に行って授業に出なければ、勉強もわからなくなって、学校がつまらなくなってしまうという親心的配慮からであろう。

確かに授業に出たくなくて怠け心から保健室に行く子もいるだろう。しかし中には心の病で保健室に行きたがる子どもたちのことも忘れてはならないと思う。むろん子どもの心の問題を扱うところが保健室でなければならないというわけではない。学校によっては学校内で子どもの相談を扱う部屋（カウンセリングルーム）を設けているところもある。しかし学校組織の中で子どもの相談やカウンセリングを行っている場があっても、その仕事を一般の教諭が他の仕事と兼任していたり、担当者に必ずしも専門的知識が十分でなかったり、またとかく指導的になりがちで、子どもたちのほうからは相談にいきにくい場合も多い。むろんこうした場をもつ学校は少ないから、実際には子どもに一番身近で信頼関係のある担任の先生に相談することになるのだが、担任の先生は成績をつけるし、忙しそうに話にくいと感じる子もいる。そこで、いつでも保健室にいてくれて、どんなささいな話でも聞いてくれそうな、いわば母親的イメージの養護教諭のところに子どもの足が向い

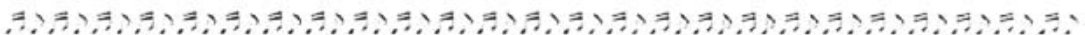
てしまうのだろう。

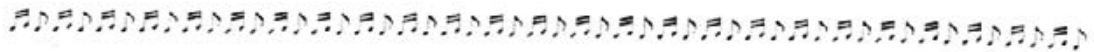
保健室によく行く子どもたちは、十分に自分の話を聞いてくれて自分を認めてくれる存在を求めているのではなかろうか。だから彼らを一概に怠け心の持ち主とかエスケープ集団と見なして、「保健室に行くな」というのは、ますます子どもたちを苦しめることになる。こうしたニーズをもった子どもたちに対して、学校の中に保健室以外の窓口をつくるか、あるいは、保健室の相談体制をより充実させる必要があると思われる。

今回の調査の中で学校にスクールカウンセラーを置くことについては養護教諭の4割以上が強く賛成し、3割くらいはその必要がないと意見が分かれていた。多くの仕事をかかえていて、子どもの話をゆっくり聞いてられないというジレンマにありながら、しかし、からだの問題と心の問題は切り離せないから、どちらも養護教諭が取り組んでいく問題であるという意識があるのだろう。

いずれにせよ、学校の中で子どもの相談に当たろうとする場合、担任と養護教諭あるいはスクールカウンセラーとの連携のあり方を考えなければならない。現状では担任が子どもの総責任者で、子どものことは何でも学級担任を通して行われている。例えば、養護教諭がする家庭への連絡にしても、担任を通して行う場合が多い。もし担任を通さずに子どもと連絡を取り合えば、担任も学校側もそれを快く思わないだろう。

しかし、担任はほかの子どもたちもみなけ





ればならないし、授業や校務分掌、行事などで振り回され、ひとりの子どもにつきっきりになれない状態である。もし、担任に子どもの相談役をまかせるのであれば1学級の子どもの数を減らすなり、ほかの職務を減らすなりして、ゆとりや研修、あるいは子どもとじっくり向き合う時間を増やすことが望まれるだろう。また、もし養護教諭やスクールカウンセラーが子どもの相談役を行うとすれば、担任を越えて、もっと彼らにまかせる部分があってもいいのではなかろうか。

自由回答では、多くの方がスペースをはみ出すほどのたくさんの意見を書いてくださった。自信にあふれた頼もしい意見もあれば、悩みをかかえて苦労している様子を書いてく

だされた方もあった。また、現状の差し迫った問題点を詳しく書いてくださった方もいる。それらの回答から養護教諭として、子どもを思う気持ちや熱意がひしひしと伝わってきた。

多くの養護教諭が仕事が忙しすぎて子どもとゆっくり話をすることができないと答えている。しかし忙しいと感じているのは、担任も、そして子どもたちも同じかもしれない。学校がもっとゆとりをもって生活できる空間になったらと願わずにいられない。

最後になりましたが、お忙しい中調査にご協力いただき、貴重な意見を提供していただいた養護教諭の方々に厚く御礼申し上げます。

